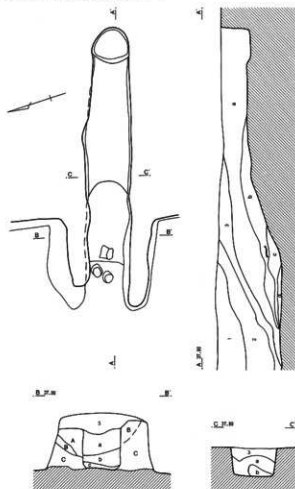


第51号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.2	4.7		BCEGH	B	橙	85	
2	坏	(14.8)	(4.1)		BCEGH	B	橙	25	
3	坏	(13.0)	(4.2)		BCGH	B	橙	30	
4	坏	13.8	4.7		BCGH	B	明赤褐	70	SJ-66と接合 床面+6cm
5	鉢	(10.6)			BCDH	C	鈍橙	20	カマド
6	壺	(19.2)			BCGH	B	橙	45	カマド一括と接合
7	甕			8.0	BCEGH	A	鈍橙	70	
8	甕	(13.0)			BCGH	B	鈍赤褐	20	カマド

第231図 第51号住居跡カマド



第51号住居跡 カマド土層註

- a 褐色 焼土粒子・炭化物粒子・酸化鉄粒子多量
- b 暗赤褐色 焼土粒子多量
- c 暗褐色 焼土粒子・炭化物粒子多量
- d 褐色 焼土粒子微量
- 焼締層土
- A 灰黄褐色 炭化物粒子微量
- B 暗赤褐色 焼土粒子多量
- C 灰褐色

0.67m、深さ0.79mの平面円形を呈する。覆土上層からは多量の炭化物粒子が検出された。住居跡覆土第3層に対応すると考えられる。隣接して平面形態円形で径0.37×0.37mの貯蔵穴Bも検出されたが、いずれか

らも遺物は出土しなかった。

カマドは東壁中央から検出された。床面と同レベルの燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に移行する。煙道部先端には浅い煙出しピットを設ける。煙道部底面はほぼ水平であった。燃焼部長0.96m同幅0.28m、煙道部長1.26m、同幅0.30mであった。

袖構築土は3層からなっていたが、焼土粒子、炭化物粒子を含有する層もあった。

P2東側床直から長さ0.45mの炭化材が1点検出され、P4上面には長さ20cmの礫が載っていた。

出土遺物 (第230図)

遺構の遺存状況は良好であったが、遺物の出土は少量であった。4の坏は第66号住居跡覆土出土遺物と接合した。

第66号住居跡 (第232・233図)

第66号住居跡はF・G-13・14グリッドに位置する。主軸方向はN-108°-Eを指す。主軸長4.90m、副軸長4.78mであり、端正な方形を呈する。断続しながら壁溝が巡る。

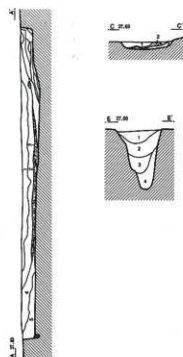
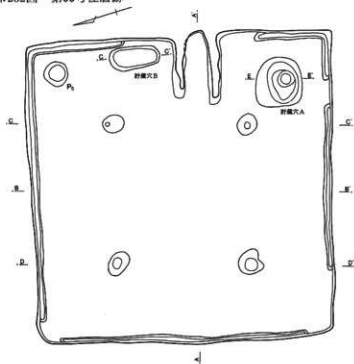
覆土は自然堆積を示すと考えるが第3層は炭化物を多量に含有していた。

主柱穴の深さはP1=0.77m、P2=0.78m、P3=0.72m、P4=0.85mであった。柱間はP1-2.20m-P2-2.14m-P3-2.20m-P4-2.23m-P1と近似した数値を示す。

カマド右側から貯蔵穴Aが検出された。径0.72×0.76m、深さ0.94mの円形を呈する。上位で不整な段を有する。少量の遺物が覆土中から出土した。

カマド左側からは貯蔵穴Bが検出された。不整な楕円形を呈し径0.80×0.36m、深さ0.11mであった。覆

第232図 第66号住居跡



第66号住居跡土層註

- 1 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量 酸化鉄粒子少量
- 2 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量 酸化鉄粒子多量
- 3 黒褐色 炭化物粒子主体 (炭化物層)
- 3' 黒褐色 炭化物粒子・灰多量
- 4 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量 酸化鉄粒子微量
- 5 褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量 酸化鉄粒子少量
- 6 暗灰褐色 炭化物粒子少量

柱穴土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子微量 酸化鉄粒子少量
- 2 暗褐色 炭化物粒子少量 酸化鉄粒子微量
- 3 灰褐色 炭化物粒子微量 酸化鉄粒子多量
- 3' 灰褐色 炭化物粒子少量
- 4 黒色 炭化物粒子・炭化材片層多量
- 4' 黒色 炭化物粒子多量

貯蔵穴A土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子微量
- 2 暗灰褐色 炭化物粒子少量
- 3 灰褐色 炭化物粒子微量 酸化鉄粒子少量
- 4 褐色 酸化鉄粒子多量

貯蔵穴B土層註

- 1 灰褐色 炭化物粒子少量
- 2 黒褐色 炭化物粒子多量 焼土粒子少量 (炭化物層)
- 3 暗灰褐色 炭化物粒子微量



土中層には多量の炭化物を含有していた。

北東コーナー部から検出されたP5は径 0.39×0.38 m、深さ0.11mであった。

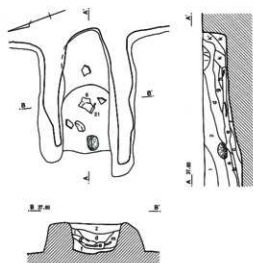
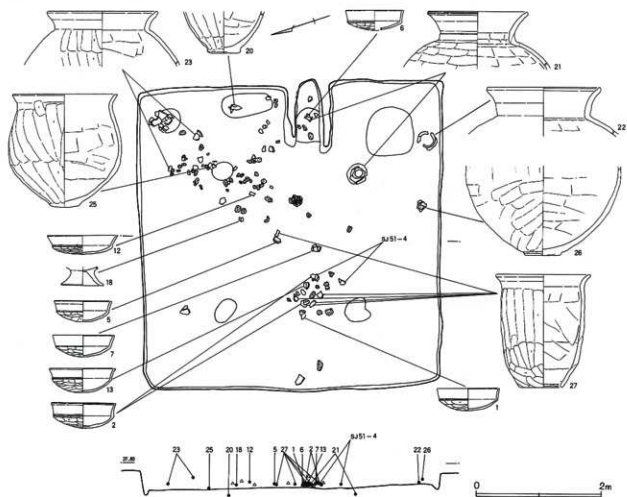
カマドは東壁中央から検出された。煙道部は削平されたと考えられる。床面と同レベルの燃焼部から強く立ち上がり煙道部に移行したと推測される。カマド残存部

長1.12m、燃焼部幅0.36mであった。なお燃焼部中央右よりからは河原石が出土した。支脚と思われるが底面および灰層よりも高い位置から出土した。

出土遺物 (第234・235図)

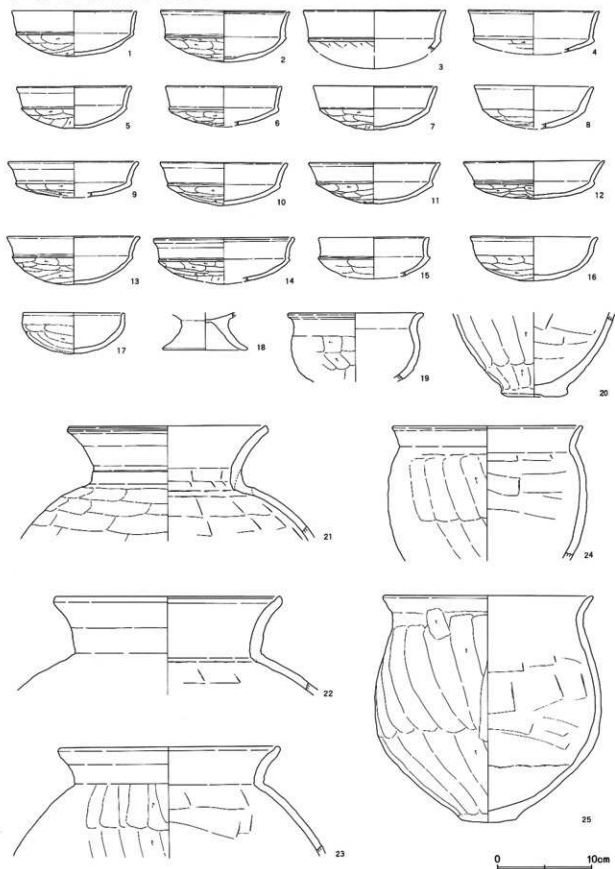
遺物は床面直上～覆土下層を中心に出土した。

第233図 第66号住居跡遺物分布図・カマド

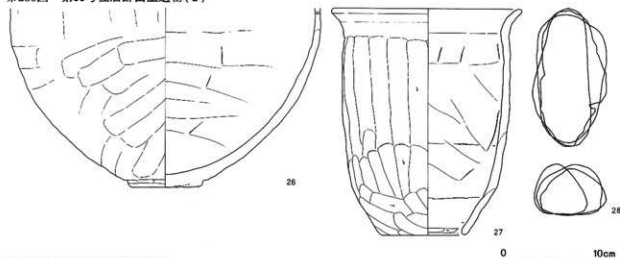


- 第66号住居跡 カマド土層柱
- a 灰褐色 焼土粒子多量 炭化物粒子微量
 - b 黒色 焼土粒子少量 灰・炭化物粒子多量 (灰層)
 - c 褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
 - d 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
 - e 赤褐色 焼土粒子・焼土ブロック多量 炭化物粒子少量 (焼土層)
 - f 黒色 焼土粒子少量 炭化物粒子・灰多量 (灰層)
 - g 灰赤褐色 焼土粒子多量 焼土ブロック・炭化物粒子少量
 - h 褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量
 - i 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量
 - j 灰色 焼土粒子多量 炭化物粒子微量
 - k 灰色 焼土粒子多量 焼土ブロック少量 灰多量
 - l 灰色 焼土粒子・焼土ブロック・灰少量
 - l' 赤褐色 焼土ブロック主体 (天井崩落土)
 - m 暗灰褐色 焼土・炭化物粒子多量

第234図 第66号住居跡出土遺物(1)



第235図 第66号住居跡出土遺物(2)



第66号住居跡出土遺物観察表

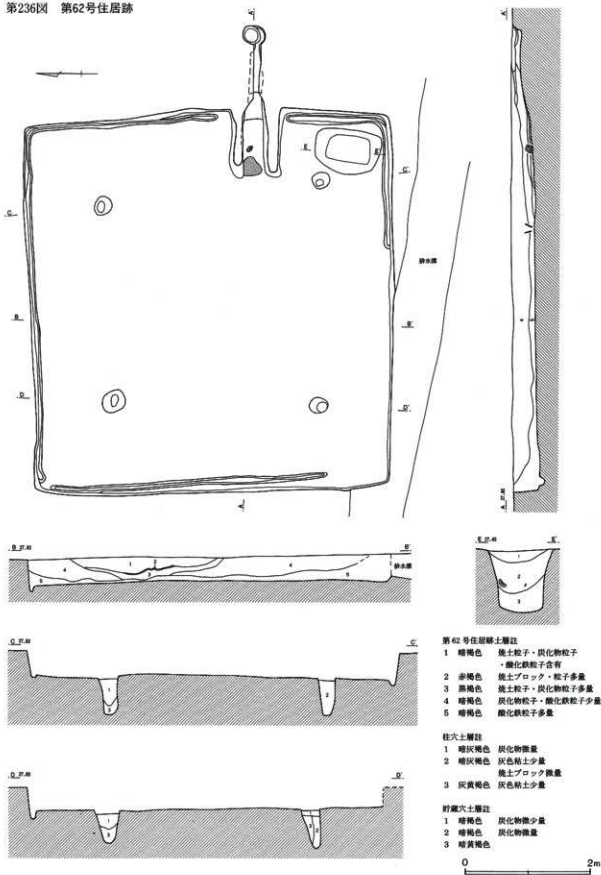
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.2	4.8		BCGH	B	橙	70	
2	坏	13.8	5.4		ABCEGH	A	暗赤灰	70	
3	坏	(15.2)	(6.2)		BCEGH	A	橙	30	
4	坏	(14.0)	(4.7)		BCEGH	B	橙	10	
5	坏	(12.2)	4.4		BCEGH	B	橙	50	
6	坏	12.4	(4.2)		BCEGH	B	橙	25	カマド
7	坏	13.2	4.6		BCGH	B	明赤褐	90	
8	坏	(12.6)	(4.6)		BCEGH	C	鈍褐	25	
9	坏	(14.0)	(3.8)		BCGH	B	橙	25	貯蔵穴A
10	坏	(13.6)	4.6		BCEGH	A	赤	25	
11	坏	14.0	4.3		BCEGH	B	橙	85	
12	坏	(15.0)	4.0		BCEGH	B	橙	35	
13	坏	14.1	5.1		BCEGH	A	橙	70	破砕後二次被熱
14	坏	(15.0)	(4.8)		BCEGH	A	暗赤灰	25	
15	坏	(11.8)	(4.3)		BCGH	A	鈍赤褐	20	
16	坏	13.6	4.7		BCGH	B	橙	75	
17	坏	10.9	4.4		CDEH	A	鈍赤褐	80	
18	高坏			(9.2)	BCGH	B	橙	30	
19	鉢	(14.6)			BCDGH	A	鈍赤褐	10	
20	甕			7.2	BCDEGH	A	灰褐	50	貯蔵穴B
21	壺	21.6	[12.0]		BCDEGH	B	橙	100	P1上層逆位 転用器台か
22	壺	24.6	[10.4]		BCEGH	C	鈍橙	100	転用器台か
23	甕	(24.0)			BCEGH	B	明赤褐	30	
24	甕	(20.6)			BCGH	A	灰褐	20	
25	甕	22.4	24.1	6.0	BCEGH	B	鈍褐	65	カマドと接合
26	壺			7.8	BCH	B	橙	45	
27	甕	20.4	24.0	9.0	BCDEGH	A	鈍赤褐	70	
28	福物石								3個体

21はP1上層から逆位で出土した壺口縁部である。その出土状況から偶然とは考えられず、柱抜き取り後の埋設の可能性が高い。また22は貯蔵穴南側の床面直上から正位で出土した。上記の2個体は残存部位がいずれも口縁部から肩部までであり転用器台の可能性が考えられる。なお12の坏は破砕後に二次被熱を受けていた。

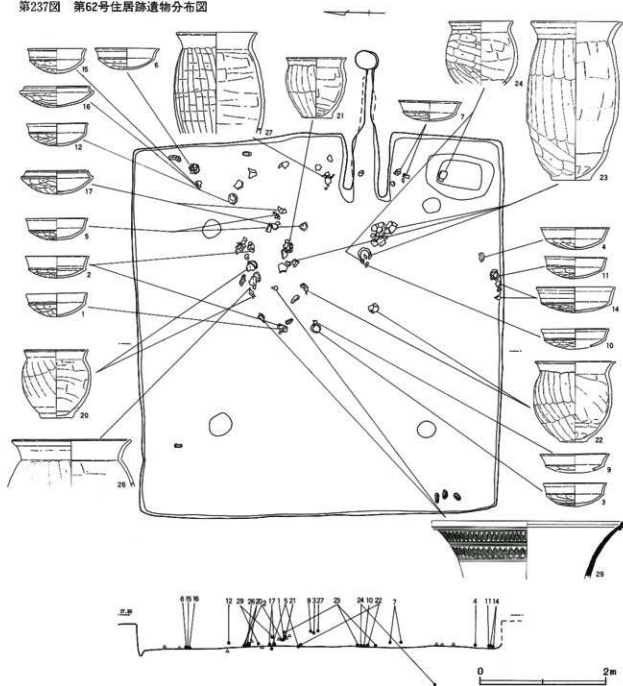
第62号住居跡 (第236～238図)

第62号住居跡はH・I-11・12グリッドに位置する。周辺は当該期の遺構分布が稀薄である。最も近接する住居跡はおよそ12m南東に第64号住居跡が所在する。排水溝に南壁の一部を壊されていたが既述遺存状況は良好で残存壁高は0.41mであった。

第236図 第62号住居跡



第237図 第62号住居跡遺物分布図



主軸方向はN-90° -Eを指す。主軸長6.07m、副軸長5.84mであり、方形を呈する。断続しながら壁溝が巡る。

なおプラン確認時には検出できなかったが、覆土第1～3層は本住居跡埋没後の遺構断面の可能性もある。第2層は焼土ブロックを多量に含有していた。

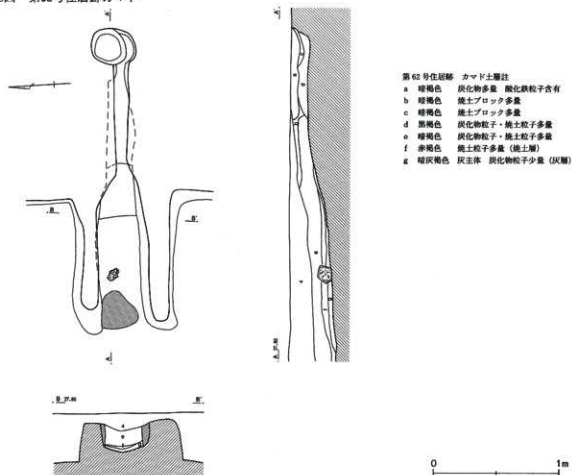
主柱穴の深さはP1=0.59m、P2=0.63m、P3=0.52m、P4=0.62mであった。柱間はP1-3.57

m-P2-3.30m-P3-3.09m-P4-3.52m-P1であり近似した数値を示す。

カマド右側から貯蔵穴が検出された。径1.04×0.70m、深さ0.50mの隅円長方形を呈する。覆土中から遺物が出土している。

カマドは東壁中央やや南よりから検出された。床面と同レベルの燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に移行する。先端からは平面円形の煙出しピットが検出

第238図 第62号住居跡カマド



された。燃焼部長0.91m、同幅0.33m、煙道部長1.47m、同幅0.10m、煙出しピットの深さ0.14mであった。火床面および袖内面の被熱硬化が顕著であった。燃焼部には支脚として礫が設置されていたが、やや左袖に寄っていた。カマド内からは遺物は出土しなかった。煙道部天井は僅かに残存していた。燃焼部底面には灰層が薄く堆積していた。

出土遺物 (第239・240図)

遺物は床面直上～覆土中層を中心に出土した。住居跡東半にやや偏っていた。

須恵器蓋模倣の坏は上層出土(2、3、9)のものと床面直上のものでも形態的には明瞭な差異は見いだせない。14は口径16.9cmと大形である16、17は須恵器身模倣の坏である。口縁部は強く内傾する。いずれも端部は鈍い凹状を呈する。23の甕底部には木葉痕が残るが、磨減が著しかった。29は須恵器甕の口縁部であ

る。2段の櫛歯波状文が施文される。

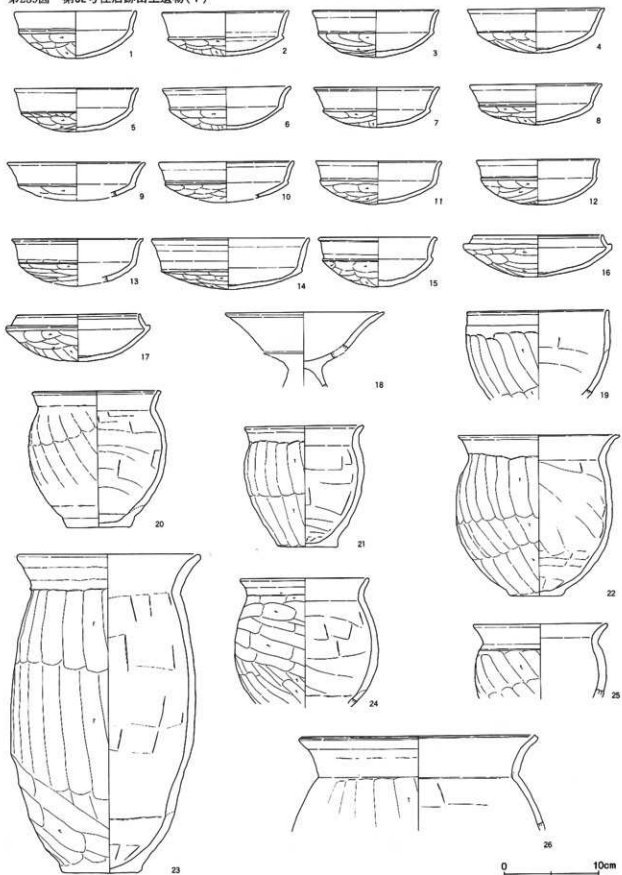
編物石は床面直上を主体に12個体出土した。長さ14.6cm、幅6.1cm前後と形態は近似する。31は貝果穴痕泥岩である。

第64号住居跡 (第241図)

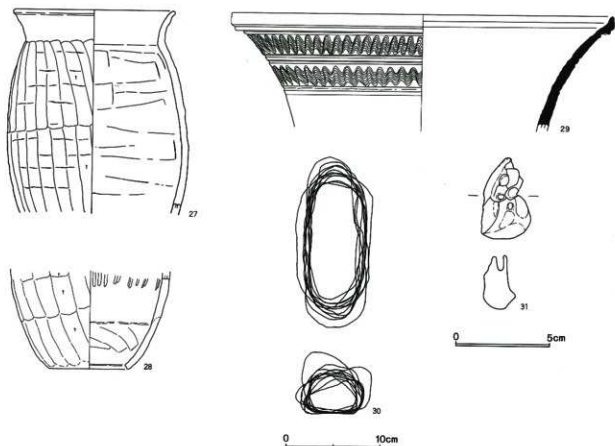
第64号住居跡はJ-12・13グリッドに位置する。土取りにより遺構確認面は第62号住居跡近辺よりもおよそ50cm低く、検出できなかった壁面がある。ただし床面は色調および硬度により判別でき、住居跡範囲を確定することができた。調査区端に位置し、北東コーナー部は調査できなかった。また南西コーナー部を第8号溝により壊されていた。周辺は当該期の遺構分布が稀薄である。最も近接する住居跡はおおよそ12m北西に第62号住居跡が所在する。

カマドは削平により壊されていたが、東側に位置する不整形の被熱硬化部をカマド燃焼部と推定すると

第239図 第62号住居跡出土遺物(1)



第240図 第62号住居跡出土遺物(2)



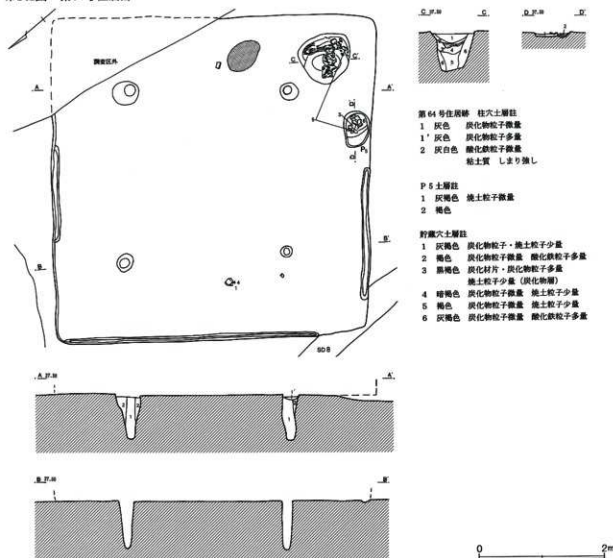
第62号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	环	13.1	5.0		BCEGH	B	橙	85	
2	环	13.6	4.7		BCEGH	A	橙	70	
3	环	13.5	5.0		BCEGH	A	橙	100	覆土上層
4	环	(14.6)	4.7		BCGH	B	橙	45	
5	环	13.3	4.5		BCGH	B	橙	90	
6	环	13.8	4.4		BCEGH	C	鈍橙	95	
7	环	(13.6)	4.2		BCEGH	B	橙	35	
8	环	(14.2)	4.3		BCEGH	B	橙	25	
9	环	(14.8)	(4.0)		BCGH	C	鈍橙	20	覆土上層
10	环	(14.4)	(4.2)		BCEGH	B	橙	45	
11	环	13.4	4.6		BCEGH	B	橙	90	
12	环	13.1	4.7		BCEGH	B	橙	100	
13	环	(14.0)	(5.0)		BCEGH	A	橙	30	
14	环	16.9	5.4		BCEGH	A	橙	70	
15	环	12.8	5.3		BCGH	B	橙	85	
16	环	13.8	4.4		BCDEGH	B	鈍赤褐	80	
17	环	13.4	4.9		BCEGH	A	橙	95	
18	高环	(16.9)			BCEGH	B	橙	25	
19	鉢	(15.0)			BCGH	A	明赤褐	25	
20	甕	(13.8)	14.5	6.8	BCEGH	B	明赤褐	40	
21	甕	12.8	12.8	6.4	BCGHJ	C	鈍橙	95	
22	甕	17.2	17.1	6.0	BCEGH	B	明赤褐	90	
23	甕	19.6	34.0	8.4	BCEGH	B	鈍黄橙	90	覆土上層 木炭痕

第62号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
24	甕	13.8			BCEGH	A	橙	60	貯蔵穴と接合 精製
25	甕	14.4			BCEGH	A	橙	50	
26	甕	(25.6)			BCEGH	B	橙	20	覆土上層
27	甕	17.4			BCEGH	B	橙	40	
28	甕			8.5	BCEGH	B	橙	70	
29	須恵器甕	40.6			C	A	黄灰	25	12個体
30	繩物石								
31	貝殻穴或泥岩			重15.91					

第241図 第64号住居跡



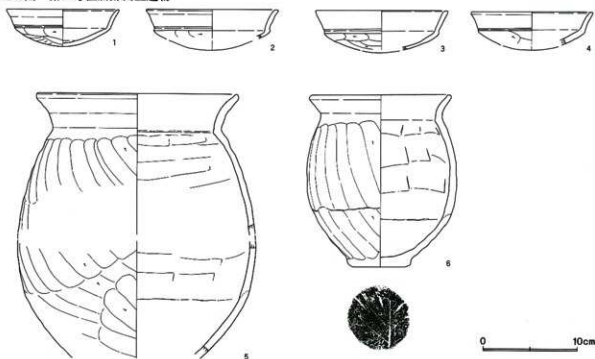
主軸方向は概ねN-130°-Eを指す。主軸長5.07m、副軸長5.06mであり、方形を呈する。部分的に壁溝が巡っていた。

主柱穴の深さはP 1=0.73m、P 2=0.78m、P 3=0.75m、P 4=0.70mであった。柱間はP 1-2.55m-P 2-2.58m-P 3-2.75m-P 4-2.51m-P

1であった。

推定カマド域の右側から貯蔵穴が検出された。径0.77×0.80m、深さ0.62mの平面円形を呈する。覆土中層の第3層には多量の炭化材片、炭化物を含有していた。P 5は深さ0.03mと浅いが、底面直上から3個体の土器破片が出土した。

第242図 第64号住居跡出土遺物



第64号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	12.0	4.0		BCEGH	B	橙	85	
2	坏	14.2			B	B	赤	15	
3	坏	(14.2)	(4.5)		BCEGH	B	橙	25	P5内
4	坏	(13.0)	(4.0)		BCDEGH	A	灰赤	10	
5	甕	(21.6)			BCEGH	A	橙	40	P5内 野藏穴
6	甕	15.2	18.2	6.7	BCEGH	A	橙	75	木葉痕 P5内

出土遺物 (第242図)

少量の遺物が出土した。坏はいずれも須器蓋換微である。6は野藏穴底面より出土した小形の甕である。底部に木葉痕が残る。

第63号住居跡 (第243図)

第63号住居跡はL・M-12グリッドに位置する。調査区東端に位置する。他遺構との重複関係は第8号溝

に北東コーナー部上面を壊されていたが周辺は当該期の遺構分布が稀薄である。土取りされて確認面は低かったが残存壁高は約0.29mと比較的遺存状況は良好であった。最も近接する住居跡はおよそ8m西に第60号住居跡が存在する。

主軸方向はN-57°-Eを指す。主軸長6.60m、副軸長6.72mであり、大形の方形を呈する。断続しながら

第63号住居跡土層註

- 1 灰色 炭化物粒子微量 粘質土
- 2 灰色 炭化物粒子微量
- 3 暗灰色 炭化物粒子極多量 (炭化物層)
- 4 暗灰褐色 炭化物粒子微量
- 5 灰色 粘土質 炭化物粒子微量
- 5' 灰色 粘土質
- 6 褐色 炭化物粒子微量

柱穴・P5土層註

- 1 灰色 炭化物粒子微量 灰色粘土主体
 - 1' 灰色 炭化物粒子多量
 - 2 灰褐色 炭化物粒子微量 灰色粘土主体
 - 3 褐色 灰色粘土ブロック含有
 - 4 灰色 灰色粘土主体
 - 5 明褐色 灰色粘土ブロック少量
- 高い側の柱穴も最下層に酸化鉄が多量に沈殿
- P6土層註
- 1 灰褐色 炭化物粒子微量
 - 2 褐色
 - 3 暗灰褐色 炭化物粒子少量

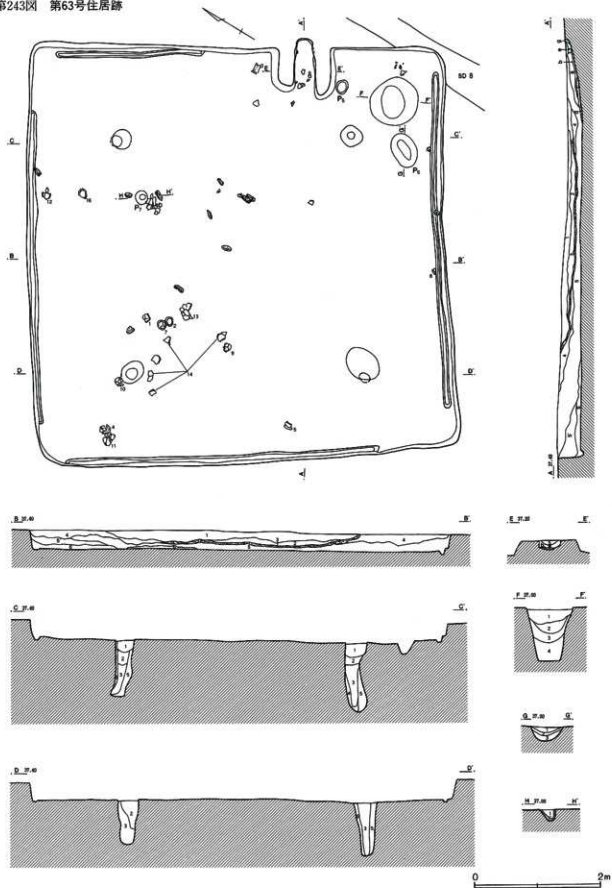
野藏穴土層註

- a 暗褐色 粘土粒子・炭化物粒子微量 粘土質
- b 暗褐色 粘土粒子・炭化物粒子微量 粘土質
- 3 褐色 粘土粒子・炭化物粒子微量 粘土質
- 4 灰褐色 炭化物粒子微量 粘土質

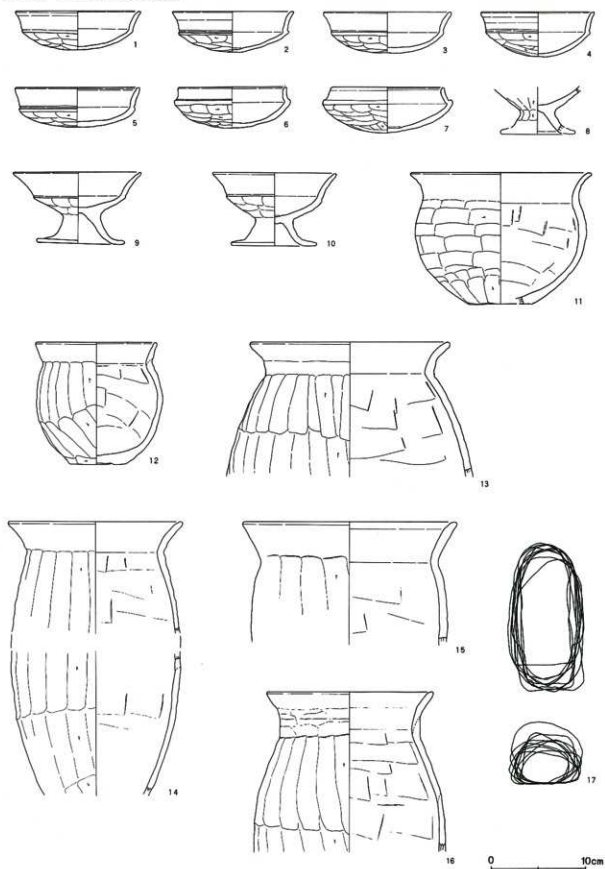
カマド土層註

- a 暗褐色 粘土粒子・粘土ブロック・炭化物粒子多量 粘土質
- b 暗灰褐色 灰主体 炭化物粒子少量 (灰層)
- c 赤褐色 粘土粒子主体
- d 灰褐色 粘土・炭化物粒子少量
- e 暗赤褐色 粘土粒子・粘土ブロック多量
- f 赤褐色 粘土粒子・粘土ブロック極多量
- g 灰褐色 粘土粒子・粘土ブロック・炭化物粒子少量

第243图 第63号住居跡



第244図 第63号住居跡出土遺物



第63号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	環	13.4	4.1		BCEGH	B	橙	90	貯蔵穴一括	
2	環	12.9	4.3		BCEGH	A	橙	100		
3	環	(13.6)	4.4		BCEGH	B	橙	60		
4	環	12.0	4.7		BCEGH	B	橙	95		
5	環	(13.4)	4.2		BCEGH	B	橙	35		
6	環	(11.6)	4.3		BCEGH	A	明赤褐	40		
7	環	12.0	4.8		BCEGH	C	鈍褐	95		
8	高環				BCEFGH	A	明赤褐	90		
9	高環	13.7	7.6	(9.5)	BCDEGH	B	橙	75		
10	高環	13.2	7.7	9.2	BCDEGH	B	橙	90		
11	鉢	(19.4)	(13.9)	(6.8)	BCEGH	A	明赤褐	25		
12	甕	13.0	12.9	6.2	BCGH	B	鈍橙	90		
13	甕	(21.4)			BCEGH	C	橙	45		内面黒色粒子斜め付着
14	甕	(18.6)			BCEGH	C	灰黄褐	30		
15	甕	(23.0)			BCDEGH	B	鈍橙	20		
16	甕	17.8			BCFGH	B	鈍黄橙	65		
17	編物石							10個体		

ら壁溝が巡る。

覆土は各層の流入状況から自然堆積を示すと考えるが、第3層は炭化物粒子を多量に含有していた。

主柱穴の深さはP1=1.10m、P2=0.85m、P3=0.72m、P4=0.90mであった。柱間はP1-3.83m-P2-3.75m-P3-3.70m-P4-3.75m-P1であった。

カマド右側から貯蔵穴が検出された。平面形態円形で径0.75×0.75m、深さ0.82mであった。覆土中から3の環が出土した。また隣接して検出されたP6は不整形円形を呈し、深さ0.22mであった。

カマドは東壁中央右よりから検出された。床面から緩やかに傾斜して燃焼部に移行する。煙道部は削平された可能性が高い。カマド長0.86m、同幅0.34mであった。カマド内からは少量の土器片のみ出土した。灰層の発達が顕著であった。

出土遺物 (第244図)

少量の遺物が主に覆土上層～下層から出土したが多くは住居跡覆土第2、3層からであった。

蓋模倣の環は口径13cm前後で口縁部が小さく外反するものが主体を占める。色調はすべて橙色である。

6、7は須恵器身模倣である。口縁部は小さく内傾する。口縁端部は内そぎ状を呈する。7の端部は僅かに凹状となる。

9、10の高環はいずれも覆土上層出土である。大きく外反する口縁部を有する環部と短く大きく外反する脚部からなる。13の甕上半部内面には黒色粒子痕が斜めに付着していた。

主に住居跡中央覆土下層から編物石が10個体出土した。いずれも長さ14.2cm、幅6.6cmほどで近似した大ききである。

第60号住居跡 (第245図)

第60号住居跡はL-10、M-10・11グリッドに位置する。本調査区の南東端に位置する。土取りにより、部分的に壁面が検出できたに過ぎないが、床面は色調および硬度により比較的容易に識別でき住居跡範囲を確定することができた。

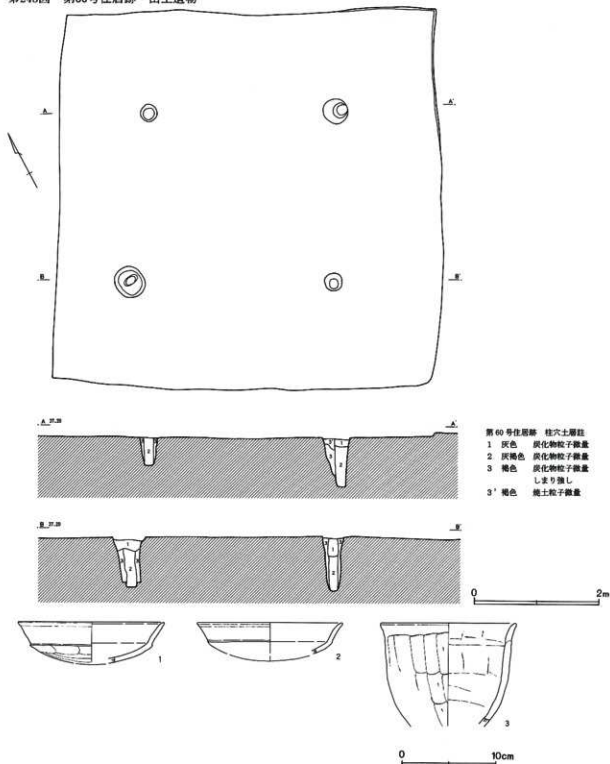
カマドは削平のためか痕跡もなかった。仮に北側に構築されていたとすると主軸方向は概ねN-28°-Eを指す。主軸長5.95m、副軸長6.06mであり、方形を呈する。貯蔵穴、壁溝はなかった。

柱穴の深さはP1=0.77m、P2=0.87m、P3=0.80m、P4=0.43mであった。覆土第2層は柱痕を示すと考えられる。柱間はP1-2.77m-P2-3.24m-P3-2.65m-P4-3.10m-P1であった。

出土遺物 (第245図)

遺物は少量の土器破片のみ床面から出土した。いずれも残存率は低い。

第245図 第60号住居跡・出土遺物



第60号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	环	(15.6)	(4.6)		BCGH	B	橙	25	
2	环	(15.6)	(4.1)		BCGH	B	橙	35	
3	甕	(14.6)			BCDH	C	橙	20	

第89号住居跡 (第246図)

第89号住居跡はI-17、J-16・17グリッドに位置する。調査区東端に位置する。周辺は当該期の遺構分布が稀薄であった。最も近い第64号住居跡でも直線距離でおよそ35m離れている。南東コーナーは調査区外であった。残存壁高は0.14mであった。

主軸方向はN-50° E-Eを指す。主軸長3.27m、副軸長1.87mであり、やや歪んだ縦長の長方形を呈する。

覆土は自然堆積を示すと考えるが、第3層には多量の炭化物、焼土粒子が認められた。

壁溝、貯蔵穴、ピット等の施設はなかった。

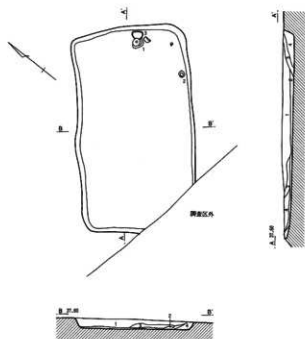
焼土ブロック等の分布から北壁にカマドが構築され

ていた可能性が高いが、袖、燃焼部の被熱痕、灰層は検出されなかった。

出土遺物 (第246図)

北壁際から1の坏と3の壺底部、東壁際からは2の坏が出土した。坏はいずれも完形である。1、2とも口径11.8cm、器高4.0cmと法量は同一である。浅い体部と外傾する口縁部からなる。2の器壁は厚く、体部に白色粘土を含有していた。3は床面直上から逆位で出土した。底部は一定方向にヘラケズリされる。周辺には炭化物、焼土が多量に検出されカマドに類する施設の可能性がある。

第246図 第89号住居跡・出土遺物



第89号住居跡土層註

- 1 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量 酸化鉄粒子多量
- 2 灰白色 炭化物粒子少量
- 3 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 4 黄褐色 酸化鉄粒子多量



0 2m

0 10cm

第89号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	11.8	4.0		BCDEGH	B	橙	100	白色粘土含有 底部一定方向ケズリ
2	坏	11.8	4.0		BCEGH	B	橙	100	
3	壺			7.0	BCDEGH	A	橙	100	

(11) 掘立柱建物跡

本調査区からは6棟の掘立柱建物跡が検出された。古墳時代後期の土師器小片が出土した柱穴もあるが、時期が確定できる遺物は1個体も出土しなかった。覆土は焼土粒子、炭化物粒子などを少量含有しており、竪穴住居跡のものに近似していた。

本調査区から検出された遺構の時期は、古墳時代後期以降のものが主体を占め、平安時代等の竪穴住居跡がなかったことから、これらの掘立柱建物跡の帰属時期を古墳時代後期とする。なお重複が確認されたものはいずれも竪穴住居跡よりも新しかった。

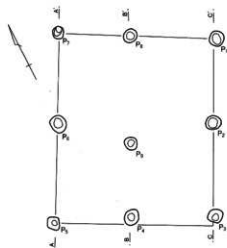
なお17号バイパス関連の調査区からは1棟の掘立柱建物跡が検出されている。

第1号掘立柱建物跡 (第247図)

第1号掘立柱建物跡はD-7グリッドに位置する。他遺構との重複はなかったが、第20号住居跡と0.8mと隣接していた。周辺の住居跡で主軸方向が近似したものはなかった。覆土は均一な暗褐色土であった。炭化物粒子を含有していた。遺物は出土しなかった。

主軸方位はN-26°-Eを指す。規模は2×2間の総柱である。桁行2.81m、梁行2.59mである。

各柱穴の平面形態は円形を呈し、径0.19~0.27m、深さはP1=0.33m、P2=0.35m、P3=0.33m、P4=0.33m、P5=0.30m、P6=0.37m、P7=第247図 第1号掘立柱建物跡



0.30m、P8=0.35m、P9=0.32mである。

柱間距離はP1-1.33m-P2-1.50m-P3-1.35m-P4-1.24m-P5-1.57m-P6-1.46m-P7-1.16m-P8-1.35mであった。

第2号掘立柱建物跡 (第248図)

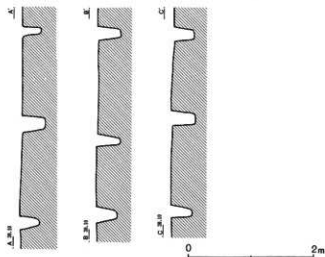
第2号掘立柱建物跡はF・G-9・10グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第56号住を壊していたが調査段階の不手際により住居跡を先行して発掘調査してしまった。また第3号掘立柱建物跡とも重複するが新旧関係は不明である。

周辺の住居跡で主軸方位がほぼ一致するものとして第4住居跡群の第5号住等がある。

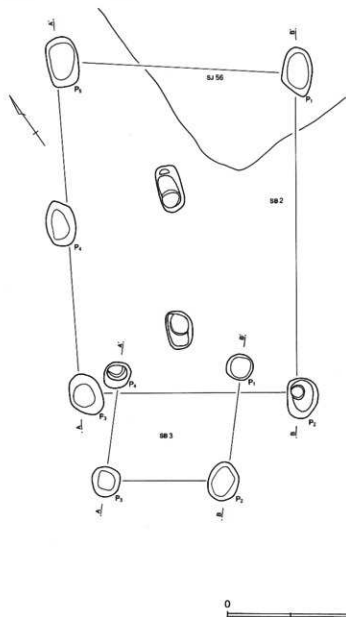
主軸方位はN-24°-Eを指す。規模は2×1間で、桁行5.4m、梁行3.4mであるが、歪みが大きい。東側の中間柱が検出できなかった。

各柱穴は主に隅円方形を呈していた。長軸径0.63~0.79m、深さはP1=0.30m、P2=0.77m、P3=0.66m、P4=0.70m、P5=0.70mである。覆土からは少量の炭化物粒子と焼土粒子が検出された。

柱間はP1-5.10m-P2-3.41m-P3-2.76m-P4-2.62m-P5-3.78m-P1であった。なお本遺構範囲内から平面形態隅円方形の2基のピットが検出されたが、配置等が一致せず、本遺構との関係は不明である。



第248図 第2・3号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡 (第248図)

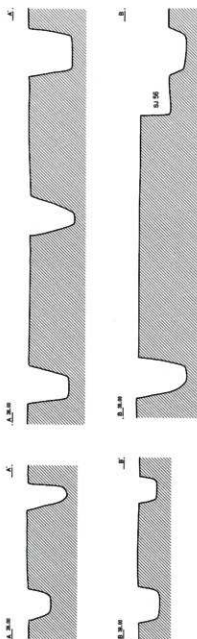
第3号掘立柱建物跡はG-9グリッドに位置する。

第2号掘立柱建物跡と重複するが新田は不明である。

主軸方位はN-45°-Eを指す。規模は1×1間、桁行1.85m、梁行1.89mであるが、歪みが大きい。

各柱穴は主に円形を呈し、径0.41~0.59m、深さはP1=0.29m、P2=0.35m、P3=0.35m、P4=0.62mである。

柱間距離はP1-1.86m-P2-1.88m-P3-1.80m-P4-2.00m-P1であった。



第4号掘立柱建物跡 (第249図)

第4号掘立柱建物跡はH-6グリッドに位置する。

他遺構との重複関係は第35住の床面を壊していたが、調査時の不手際により、住居から発掘調査してしまった。周辺には同じ軸方位を指す住居跡はない。

主軸方位はN-15°-Eを指す。規模は2×1間で、桁行2.19m、梁行2.27mである。

各柱穴の平面形態は円形を呈し、径0.23~0.40m、深さはP1=0.15m、P2=0.10m、P3=0.27m、P4=0.18mである。覆土はほぼ均一で焼土ブロック、

炭化物粒子を少量含有する暗灰褐色土であった。

柱間距離はP1-1.12m-P2-1.09m-P3-2.27m-P4-1.11m-P5-1.13m-P6-2.17m-P1であった。

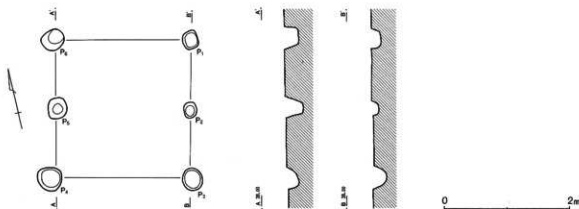
第5号掘立柱建物跡 (第250図)

第5号掘立柱建物跡はF-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第65号住を壊していたが、調査第249図 第4号掘立柱建物跡

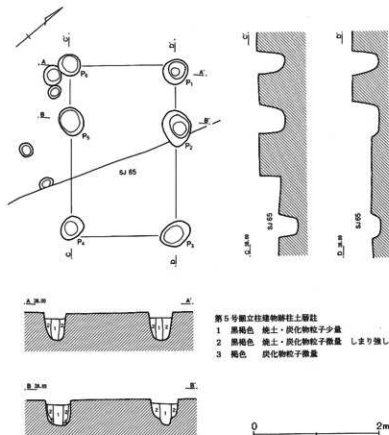
段階の不平際により、住居跡から着手してしまった。

主軸方位はN-51°-Wを指す。規模は2×1間で、桁行2.60m、梁行1.66mである。近隣では第4住居跡群の第27号住の長軸とはほぼ同じ方位を指す。

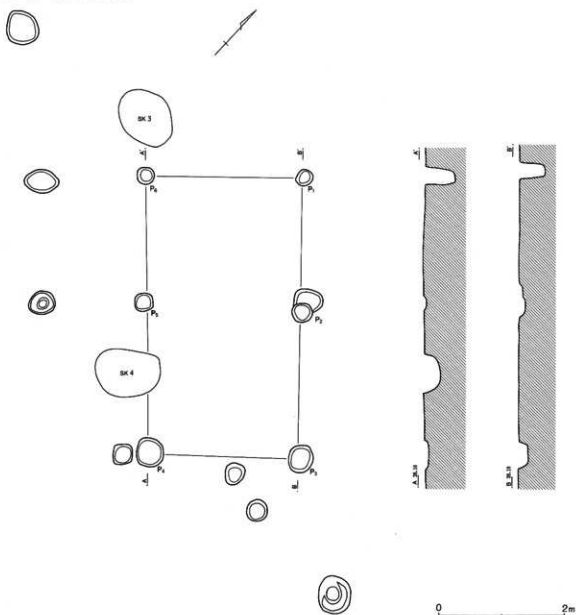
各柱穴は主に円形を呈し、径0.34-0.57m、深さはP1=0.43m、P2=0.43m、P3=0.15m、P4=0.32mである。遺存状況が良好であった4基の柱穴覆



第250図 第5号掘立柱建物跡



第251図 第6号掘立柱建物跡



土第1層は軟質で焼土、炭化物粒子を少量含有する。柱痕を示していると考えられる。

柱間距離はP1-0.92m-P2-1.68m-P3-1.66m-P4-1.70m-P5-0.90m-P6-1.70m-P1であった。間の2基が極端に北側に偏っていた。

なお周辺からは4基のピットが検出されたが性格は不詳である。

第6号掘立柱建物跡 (第251図)

第6号掘立柱建物跡はF-4・5グリッドに位置する。第3号土壌と重複していたが新旧関係は不明であ

る。また上屋を想定すると、第3号土壌および周辺のピット群とも重複するものと思われる。

主軸方位はN-43°-Wを指す。規模は2×1間で、桁行4.46m、梁行2.42mである。各柱穴の平面形態は円形を呈するが、P2は段を有し不整な形態である。径0.28~0.46m、深さはP1=0.42m、P2=0.08m、P3=0.14m、P4=0.06m、P5=0.03m、P6=0.45mである。柱間距離はP1-2.03m-P2-2.50m-P3-2.43m-P4-2.45m-P5-2.04m-P6-2.54m-P1であった。

(12) 土壇

第1号土壇 (第252図)

F-13グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.00×1.02m、深さは0.29mであった。遺物は出土しなかった。

第2号土壇 (第252図)

F-15グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径0.92×0.85m、深さは0.51mであった。遺物は出土しなかった。

第3号土壇 (第252図)

F-4グリッドに位置する。平面形態は不整形円形を呈する。規模は径0.98×0.78m、深さは0.17mであった。遺物は出土しなかった。

第4号土壇 (第252図)

F-5グリッドに位置する。平面形態は不整形円形を呈する。規模は径0.74×1.03m、深さは0.27mであった。遺物は出土しなかった。

第5号土壇 (第252図)

J-6グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径0.75×0.71m、深さは0.27mであった。覆土上層から多量の焼土粒子が検出された。遺物は出土しなかった。

第6号土壇 (第252図)

J-6グリッドに位置する。平面形態は不整形円形を呈する。規模は径1.71×1.38m、深さは1.38mであった。覆土上層から多量の焼土粒子が検出された。遺物は出土しなかった。

第7号土壇 (第252図)

G-4グリッドに位置する。平面形態は不整形円形を呈する。規模は径1.25×0.70m、深さは0.27mであった。遺物は出土しなかった。

第8号土壇 (第252図)

D-10グリッドに位置する。平面形態は不整形隅円方形を呈する。規模は径1.78×1.30m、深さは0.11mであった。遺物は出土しなかった。

第9号土壇 (第252・253図)

I-3・4グリッドに位置する。平面形態は不整形

円形を呈する。規模は径1.37×1.15m、深さは0.38mであった。覆土中より古銅時代後期の裏底部が出土した。覆土は各層の流入状況から自然堆積と思われるが、炭化物、焼土粒子を含有していた。

第10号土壇 (第252・253図)

J-9グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径0.42×0.37m、深さは0.18mであった。底面直上から甌が出土した。胴部下半を欠損する。

第11号土壇 (第252図)

H-9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第1号住居跡を壊していた。平面形態は円形を呈する。規模は径0.62×0.76m、深さは0.30mであった。遺物は出土しなかった。

第12号土壇 (第252図)

C-6グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第19号住居跡を壊していた。平面形態は円形を呈するが、中位で段を有する。規模は径0.70×0.56m、深さは0.24mであった。遺物は出土しなかった。

第13号土壇 (第252図)

G-5グリッドに位置する。平面形態は不整形円形を呈する。規模は径0.58×0.53m、深さは0.16mであった。遺物は出土しなかった。

第14号土壇 (第252・253図)

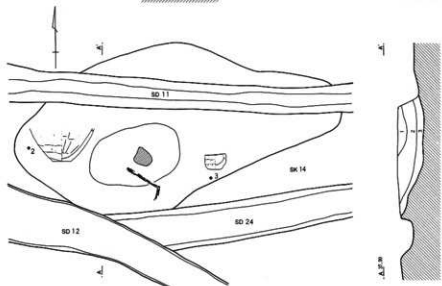
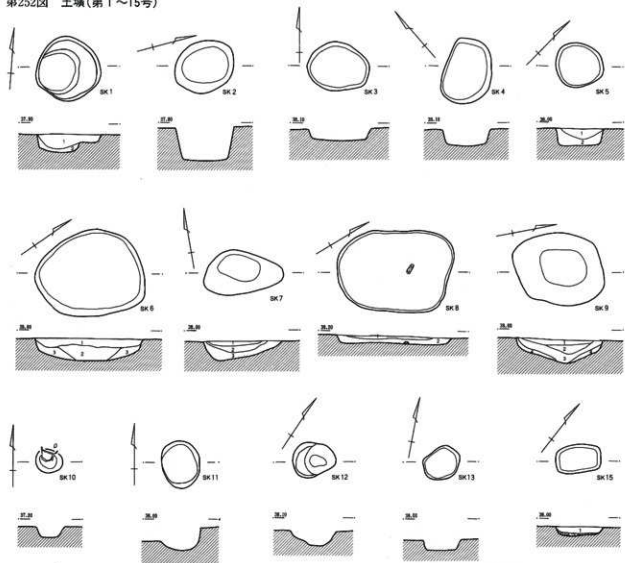
G-17グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第11、12、24号溝に壊されていた。規模は径5.20×2.61m、深さは0.43mの不整形円形である。覆土は大きく3層からなり、各層とも焼土粒子、炭化物粒子を多量に含有していた。また最下層からは灰が検出された。炭化材も底面直上から検出された。

遺物は覆土中から比較的多く出土した。2は裏底部である。また3はほぼ完形のミニチュア土器である。指頭により成形される。

第15号土壇 (第252図)

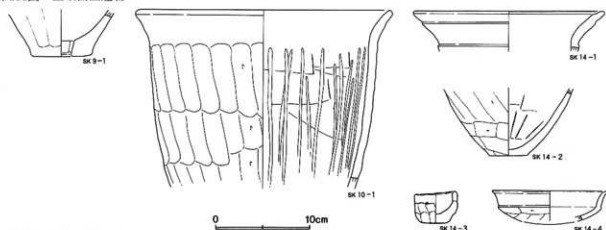
F-16・17グリッドに位置する。平面形態は長方形を呈する。規模は径0.74×0.46m、深さは0.15mであった。遺物は出土しなかったが、最下層からは炭化物層が検出された。

第252図 土坑(第1~15号)



- 第1号土坑土層註
 1 暗灰色 炭化跡少量
 2 暗褐色 炭化跡少量
- 第5号土坑土層註
 1 黒褐色 焼土・炭化物粒子少量
 2 暗灰色 焼土・炭化物粒子少量
- 第6号土坑土層註
 1 黒褐色 焼土・炭化物粒子少量
 2 暗灰色 焼土・炭化物粒子少量
 3 灰褐色 焼土粒子微量
- 第7号土坑土層註
 1 暗灰色 焼土・炭化物粒子少量
 2 暗褐色 焼土・炭化物粒子少量
 3 暗褐色 炭化物粒子微量
- 第8号土坑土層註
 1 黒褐色 焼土・炭化物粒子少量
 2 灰褐色 炭化物粒子微量
- 第9号土坑土層註
 1 暗灰色 炭化物粒子・焼土粒子少量
 2 暗褐色 炭化物粒子・焼土粒子少量
 3 灰褐色 炭化物粒子微量
 4 褐色 しまり強し
- 第14号土坑土層註
 1 黒褐色 焼土・炭化物粒子少量
 2 暗褐色 焼土・炭化物粒子少量
 3 黒色 焼土・炭化物粒子・灰多量
- 第15号土坑土層註
 1 暗灰色 焼土・炭化物粒子少量
 2 黒灰色 炭化物主体

第253図 土壌出土遺物



土壌跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	甌			(6.4)	BCEGH	C	灰黄	20	第9号土塚 孔径2.0cm
1	甌	(27.6)			BCEGH	B	橙	40	第10号土塚
1	甕	(20.4)			BCEH	B	橙	20	第14号土塚
2	甕			4.2	BCGH	C	鈍黄橙	50	第14号土塚
3	ミニチュア	4.6	3.4	3.2	BCH	C	灰黄褐	90	第14号土塚
4	坏	(12.4)	(3.5)		BCEH	B	橙	15	第14号土塚

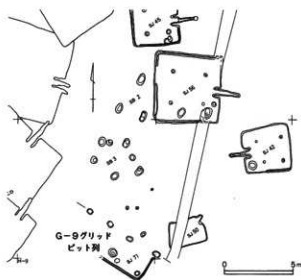
(13)ピット群

G-9グリッド ピット列 (第254・255図)

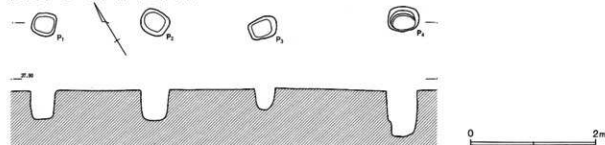
G-9グリッドから4基のピットからなるピット列が検出された。調査段階では周辺に第3号孤立柱建物跡、第71号住等が存在していたため、精査に努めたが、周辺からは本遺構と対応するピットは検出されなかった。軸方向はN-59° -Wを指す。

ピットの深さはP1=0.46m、P2=0.51m、P3=0.36m、P4=0.75mである。ピットの間隔はP1-1.78m-P2-1.75m-P3-2.23m-P4とはほぼ等間隔である。遺物は出土しなかったが、覆土等から古墳時代後期に帰属すると考えられる。

第254図 G-9グリッドピット列配置図



第255図 G-9グリッドピット列



1-8グリッド ビット列 (第256・257図)

1-8グリッドから4基のビットからなるビット列が検出された。調査段階で、掘立柱建物跡を想定し精査を重ねたが周辺からはビットが検出されなかった。

軸方向はN-87°-Wを指す。第7住居跡群中の第32号住の南壁、第72号住北壁の延長線上に位置する。

直径0.33-0.39mで平面形態円形を呈し、深さはP1=0.27m、P2=0.18m、P3=0.23m、P4=0.24mである。P1以外の覆土第1層には、炭化物粒子、焼土粒子を含有し軟質である。柱痕を示していると考えられる。

それぞれのビットの間隔はP1-1.89m-P2-1.80m-P3-1.59m-P4とはほぼ等間隔である。

覆土中からは遺物は出土しなかったが、覆土等から古墳時代後期に帰属すると考えられる。

C・D-7・8グリッドビット群 (第258図)

C・D-7・8グリッド周辺からは計21基のビットが検出された。上記してきた密集する住居跡群の北縁辺に位置する。また本ビット群の北方は17号バイパス関連の調査区が検出された住居跡は2軒のみであり、住居跡の分布の稀薄な地域である。

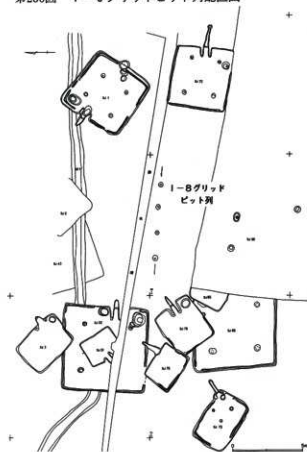
本ビット群に近接して第1号掘立柱建物跡が確認されたことから、掘立柱建物跡を想定して精査に努めたが、認定できるものもなく、ビット群とした。

ビットの配列には幾つかの列が認められる。D-D'列は深さ0.18-0.36mの4基のビットを有する。ビット間の距離は1.08-1.62mである。軸方向はおおよそN-46°-Wで近接する第20号住の主軸と一致する。

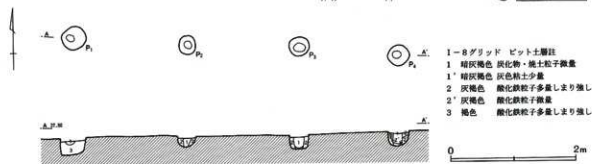
またA-A'列は3基のビットからなる軸方向N-52°-WとD-D'列とはほぼ並行する。B-B'ビット列とC-C'列の軸方向はそれぞれN-44°-E、N-41°-EでD-D'列とはほぼ直交する。

数基のビットから土師器小片が出土したが、図化成立し得なかった。ただし住居跡等との覆土の類似性から、本ビット群は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。数箇所で列構成が認められることから、横列等の可能も考えられるが、柱痕、抜き取り痕等は確認されず遺構の性格は不詳といわざるを得ない。

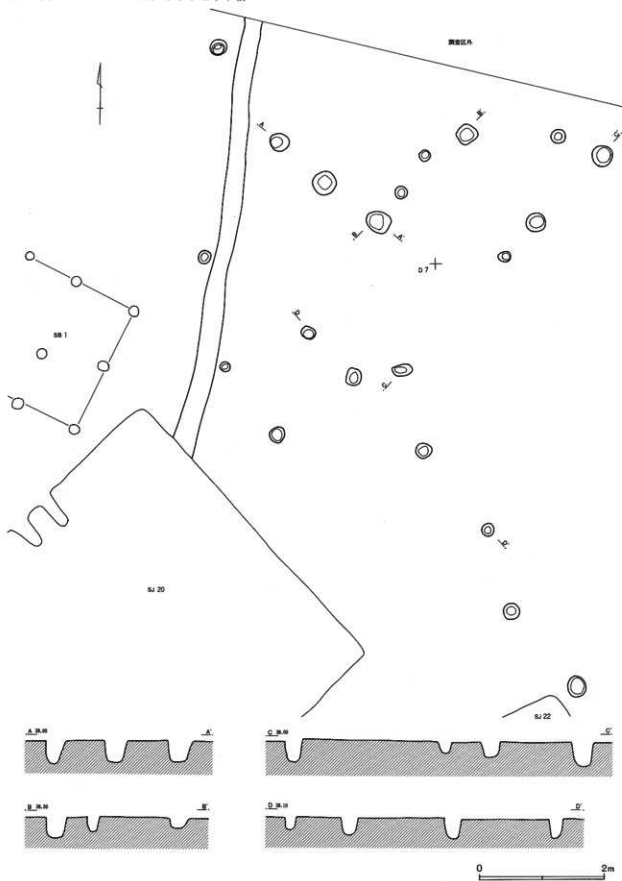
第256図 1-8グリッドビット列配置図



第257図 1-8グリッドビット列



第258図 C・D-7・8グリッドビット群



(14) 溝跡

本調査区からは計27条の溝跡が検出された。それぞれの溝間には重複、交差、平行関係等が認められたが、溝の走行方向は大きく北-南、西-東、北西-南東に3大別される。

各溝跡から出土した遺物は少量で、帰属時期を確定することが困難なものが多い。また大半の溝跡は古墳時代後期の住居跡を壊していたが、第1号溝跡のように、住居跡との重複関係から帰属時期を特定できるものもあった。ただし溝跡は前代に引き続き掘削される可能性が高く、出土遺物は埋没段階を示しているに過ぎず、住居跡等との同時期存在の証明は困難である。

また各溝跡の覆土を概観してみると、第3、5、6、8、10号溝跡からは粗砂層、シルト層および酸化鉄の沈殿層が検出された。水利に伴う溝と思われる。それ

以外の溝覆土は住居跡覆土と近似していた。また2回以上の掘削が覆土の観察で判明したものとして第5、6号溝が挙げられる。それ以外にも底面の形状から複数回の掘削の可能性が認められた遺構もあった。

溝上端幅で特筆されるのは第3・5号溝跡と第6号溝跡である。特に6号溝は最大幅1.7m、最大の深さ0.67mを測る。また第3・5号溝は深さは0.2m内と浅かったが最大幅1.9mであった。

調査区南端から検出された第10号溝跡の肩部からはビット列が検出されたことも特筆される。第8号溝跡の北側からは波板状の底面を有する遺構が検出された。性格は不明と言わざるを得ないが、近接する溝と関係するものと考え、本項で取り扱うこととした。

第2号溝跡 (第260図)

第2号溝跡は調査区南東部から検出された。走行方



位はおおよそN-40°-Wであった。上端幅0.35~0.55m、下端幅0.25m~0.45mであった。最大深度は0.27mであった。底面レベルは西端のC-5グリッドで標高37.91m、東側のE-6グリッドで37.74mであり、僅かに西側が低かった。なおC-5~D-6グリッドにかけての遺構確認面および溝底面には地山に含有される小礫が露呈していた。

他遺構との重複関係は第15号、第67号住居跡、第21号溝を壊し、第5号溝に壊されていた。調査段階での不手際により、先に住居跡の調査を行ってしまったが、前後関係は住居跡覆土にて観察できた。

覆土中から古墳時代後期の土師器小片が数点出土し

たが図化し得なかった。

第20号溝跡（第260図）

第20号溝跡は2号溝から分岐していたが、両溝の前後関係は不明であった。走行方位はおおよそN-70°-Wであった。上端幅0.36~0.82m、下端幅0.28~0.79mであった。最大深度は0.25mであった。底面レベルは西端の分岐部のE-7グリッドで標高37.64m、東側のE-8グリッドで37.53mであり、僅かに西側が低かった。なお東側先端は緩やかに傾斜しており、東側は削平された可能性がある。

他遺構との重複関係は第21号溝を壊し、第22号溝に壊されていた。

第260図 第2・20・21・22号溝跡



遺物は出土しなかった。

第21号溝跡 (第260図)

第21号溝跡は調査区南東部から検出された。第2号溝とは部分的に平行していたが、直線部は少なく大きく蛇行していた。

本遺構の西側は第5号溝に壊されていたが、その延長方向には同一と想定される遺構は検出されなかった。なお前述した通り、本遺構の覆土と第3、5号溝の覆土は全く異なっていた。また東端は小さく分岐していたが、およそ4.5mで先端が先細りとなり途切れていたため、新たな遺構番号は付さなかった。

走行方位は直線となるE-7グリッド周辺ではおよそN-90°-Wであった。上端幅0.4-2.6m、下端幅0.16m-0.8mであった。第5号溝と近接する部分では幅が広がっていた。最大深度は0.28mであった。底面レベルは西端のD-5グリッドで標高37.63m、東側のE-8グリッドで37.62mであり、ほぼ水平であった。

他遺構との重複関係は第41号住居跡を壊し、第2、20、22号溝に壊されていた。調査段階での不手際により、先に住居跡の調査を行ったが、前後関係は住居跡覆土にて観察できた。

覆土中から古墳時代後期の土師器小片が数点出土したか因化し得なかった。

第22号溝跡 (第260図)

第22号溝跡は調査区南部のC-E-7グリッドから検出された。走行方位はおよそN-0°-Wであった。上端幅0.38-0.79m、下端幅0.25m-0.59mであった。最大深度は0.22mであった。底面レベルは北端のC-7グリッドで標高37.77m、南側のE-7グリッドで37.81mであり、ほぼ水平であった。

他遺構との重複関係は第20号住居跡、第21、22号溝を壊していた。調査段階での不手際により、先に住居跡の調査を行ったが、前後関係は住居跡覆土にて観察できた。遺物は出土しなかった。

第1号溝跡 (第261図)

第1号溝跡は調査区ほぼ中央の住居跡密集区内から

検出された。上端幅0.45-0.89m、下端幅0.35-0.63m、最大深度は0.20mであった。底面レベルは、調査区西端で標高37.67m、屈曲するH-7グリッド付近で37.81m、途切れるG-11グリッドで37.51mを測る。なお本溝跡は町教委調査区からも検出されているが、途中で途切れる模様である。

本溝と住居跡との重複関係は第1、2号住が本遺構よりも新しい。特に第1号住のカマドは清理没後に構築されているのが観察できた。それ以外の第48、35、31、32、43号住との関係は、住居跡埋没後に溝が掘削されている。

町教委調査区を含めて本溝跡を西側から観てみると、約35mを方位およそN-40°-Wで走行し、H-7グリッド付近で40°程大きく屈曲する。屈曲した後はおよそ30mほどN-85°-E方向に走行し、進路を北東に向け、再度屈曲し、密集する住居跡群の東端となるG-11グリッドにて途絶えていた。

町教委調査区においても、竪穴住居跡の分布が稀薄になった所で、途切れていた模様であり、住居跡群と関連の強い遺構と思われる。

出土遺物 (第262図)

少量の遺物が主に覆土中から出土したが、出土傾向としてはやや密集する箇所が見受けられた。

8の高坏は口径18.6cmと大形である。口縁部は大きく外反する。脚部は膨らみを持たず、緩やかに外傾する。器壁は厚い。

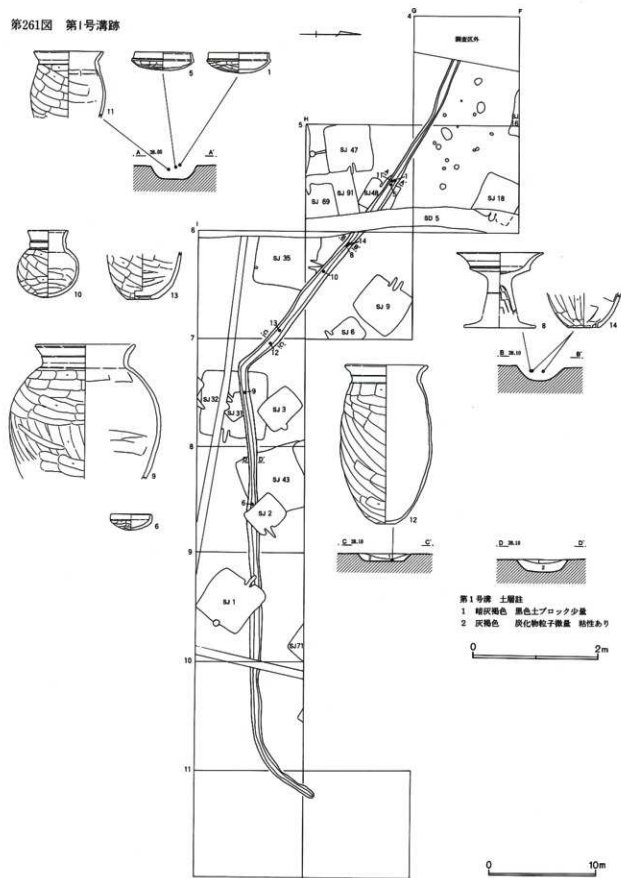
12の長胴甕は第262図中の矢印から上の口縁部は黒色、下は赤色と色調が明瞭に異なる。焼成段階での被熱の影響と思われる。遺存状況は悪いが、底部から木葉痕が観察された。

溝跡覆土出土と言うこともあり帰属時期を認定することは難しいが、遺物はほぼ同一時期の所産と思われる。これは住居跡との重複関係から見ても矛盾はない。したがって、第1号溝はこれらの土器が流入（廃棄）した段階からその機能は停止したと考えられる。

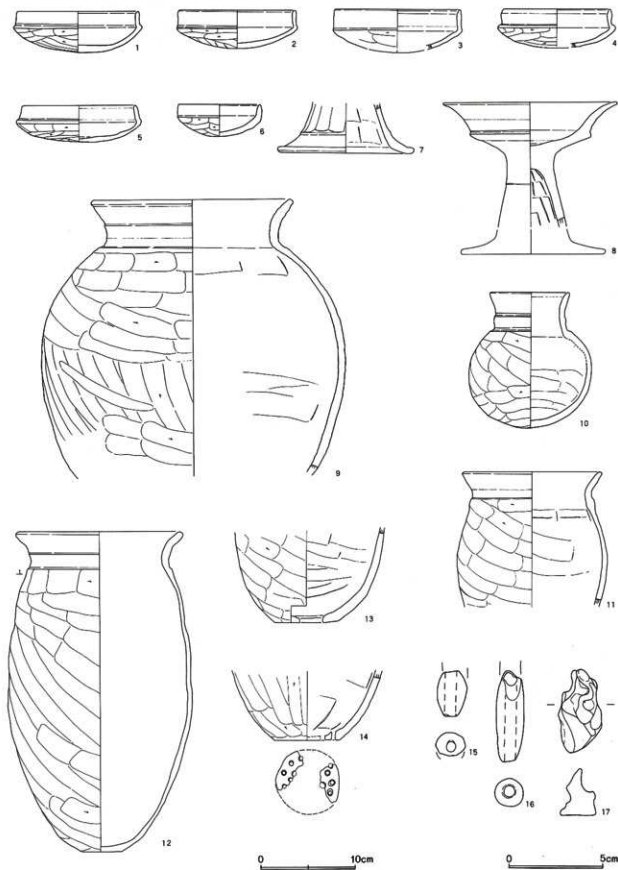
第4号溝跡 (第263図)

第4号溝跡は調査区南西側のI-J-4-7グリッ

第261図 第1号溝跡



第262図 第1号溝跡出土遺物



第1号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.2	4.3		BCDEGH	B	橙	80	白色粘土含有
2	坏	(12.4)	4.0		BCEGH	B	橙	35	白色粘土含有
3	坏	(13.6)	(4.6)		BCDGH	C	鈍褐	15	
4	坏	(11.6)	(4.1)		BCEGH	A	赤	45	
5	坏	12.2	3.9		BCEGH	A	明赤褐	85	
6	坏	8.8	3.4		BCEGH	A	暗赤褐	70	
7	高坏			(14.6)	BCEGH	A	明赤褐	25	
8	高坏	18.6			BCEGH	A	橙	75	
9	壺	(21.6)			BCEGH	A	明赤褐	35	
10	壺	8.6	14.4		BCH	B	鈍褐	95	
11	甕	14.8			BCEGH	B	橙	90	
12	甕	(17.8)	33.9	(4.4)	BCH	A	赤	40	木葉痕 (頸部より色調明瞭に異なる)
13	甕			6.8	BCEGH	B	鈍赤褐	90	転用瓶 孔径2.4cm 焼成後穿孔 内面孔周刺腫
14	甕			(6.8)	BCEGH	A	明赤褐	40	
15	土鉢	長(2.39)	径(1.69)	重(4.27)					欠損
16	土鉢	長(4.92)	径1.67	重(11.03)					欠損
17	貝殻六枚泥			重12.90					

ドから検出された。上端幅0.44~0.50m、下端幅0.32~0.38mであった。底面レベルは、調査区西端で標高37.62m、屈曲するJ-5グリッド付近で37.59m、西端のJ-7グリッドで37.64mを測る。断面形態は逆台形を呈する。

本溝跡の東側は、土取りにより削平されており完掘出来なかった。また町教委調査区からも検出されているが、南北に走行する大規模な溝跡と合流する模様である。

本溝と他遺構との重複関係は第81号住を壊し、第5号溝に壊されていたが、隣接する第23号溝との新旧関係は不明であった。

町教委調査区を含め本溝跡を西側から観てみると、およそ15mを方位およそN-60°-Wで走行し、J-5グリッド付近で30°程大きく屈曲する。屈曲した後はおよそ18mほどN-50°-E方向に走行していたのが確認された。

遺物は覆土中より土師器小片が出土したのみであり図化し得なかったが、本溝跡の走行方向の変化は前述した第1、21号溝と極めて近似している。またこの3条の溝跡は北から第21号溝跡-28m-第1号溝跡-24m-第4号溝跡とほぼ等間隔に配置している。

本溝跡以南で検出された住居跡は第80号住居跡の1軒のみであり、町教委調査区からも住居跡は検出され

ていない。したがって本溝跡は密集する住居跡群の南側を画していると言えよう。

第23号溝跡 (第263図)

第23号溝跡は調査区南西部のK-6グリッドから検出された。走行方位はおよそN-70°-Wであった。上端幅0.54~0.80m、下端幅0.38m~0.42mであった。最大深度は0.34mであった。底面レベルは標高37.59mであった。東端は緩やかに上方に向い傾斜しており、それ以来は削平された可能性が高い。

本溝跡は第5号溝に壊されていたが、隣接する第4号溝跡、第81号住居跡との新旧関係は不明である。なお第4号溝底面形態にも合流・分枝の痕跡は認められなかった。

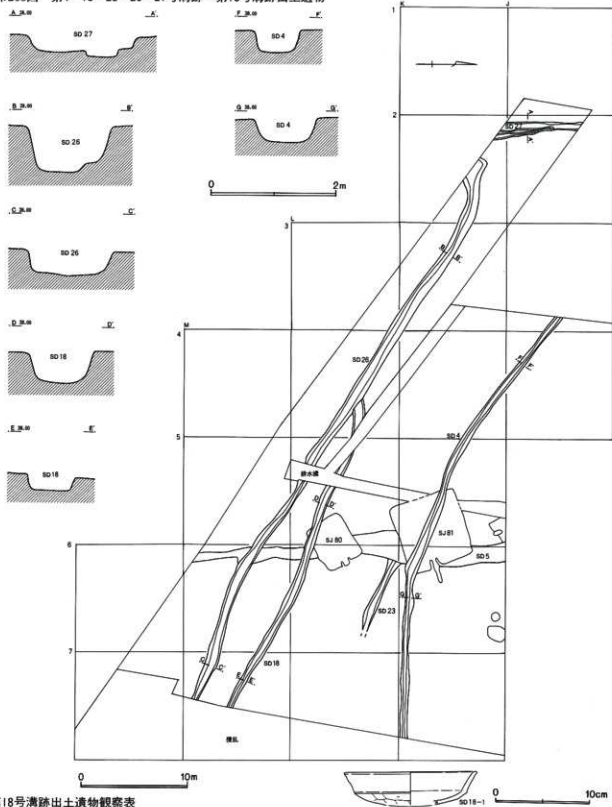
覆土中から古墳時代後期の所産と思われる土師器小片が数点出土したか図化し得なかった。

第18号溝跡 (第263図)

第18号溝跡は調査区南東部から検出された。緩やかに蛇行し、西端はK-4グリッドで第26号溝と分枝・合流する。L-7グリッド以来は土取りによる削平で検出できなかった。

ほぼ直線となるK・L-6・7グリッドでの走行方位はおよそN-60°-Wであった。上端幅0.54m~0.78m、下端幅0.45m~0.55mであった。最大深度は0.29mであった。底面レベルは西端のK-4グリッド

第263图 第4・18・23・26・27号溝跡・第18号溝跡出土遺物



第18号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色调	残存	備考
1	环	(14.2)	(3.7)		BCEG	B	橙	10	

で標高37.41m、東端のL-7グリッドで37.40mであり、ほぼ水平であった。

他遺構との重複関係は第18号住居跡を壊していた。ほぼ同じ走行方向を指す第26号溝との重複関係については、底面レベルは本遺構がおよそ0.16m高かったが、覆土からは新田関係は不明であった。同時期の可能性もある。

出土遺物 (第263図)

少量の土師器小片が覆土中から出土したがいずれも残存率が悪い。1は須恵器蓋模倣の坏である。浅い腰部と大きく外反する口縁部からなる。端部は小さく外傾する。

第26号溝跡 (第263図)

第26号溝跡は調査区南東部から検出された。西側は調査区、東側は土取りによる削平により完掘できなかった。調査区際のJ-2グリッド周辺で大きく進路を替えるが、直線部での走行方向はおおよそN-60°-Wであった。上端幅0.62~1.19m、下端幅0.53m~1.0mであった。最大深度は0.45mと深かった。

底面レベルは西端のJ-2グリッドで標高37.35m、第18号溝跡と分岐・合流するK-4グリッド付近で37.28m、東端のL-7グリッドで37.29mであり、ほぼ水平であった。

覆土中から土師器小片が出土したが、図化成立できなかった。本溝跡は東側を削平により検出できなかったため屈曲するかは不明であるが、遺存箇所の走行方向は第1号溝跡等と近似している。

第27号溝跡 (第263図)

第27号溝跡は調査区南西端のI・J-2グリッドから検出された。調査成立得た長さはおおよそ8mである。町教委調査区からは調査区を縦断して検出された模様である。

他遺構との重複は本調査区内にはなかった。

走行方向はおおよそN-0°-Wであった。上端幅0.53~1.32m、下端幅0.39m~1.18mであった。最大深度は0.18mであった。底面レベルは標高37.61mであった。底面には部分的に幅0.35m、深さ0.22mの掘

り込みが認められたが、本遺構が複数回に渡り掘削されたかは不明であった。

覆土からは粗砂層および酸化鉄沈殿層が検出された。遺物は出土しなかった。

第3号溝跡 (第264図)

第3号溝跡は調査区西端のD-5グリッドに所在する。走行方向はおおよそN-50°-Wであった。本遺構は町教委調査区からも検出されており、およそ20mの長さが検出されている。方位は変わらず直線的であった模様である。

上端幅0.58~2.10m、下端幅0.38m~1.35mであった。最大深度は0.16mであった。底面レベルは標高37.87mであり、第5号溝跡よりも浅かった。

他遺構との重複関係は第5号溝と合流していたが、覆土の観察から本溝跡は5号溝を再掘削したと思われる。合流付近は、5号溝の底面レベルのほうが低い。底面には酸化鉄の沈殿が顕著であり、検出段階では黄褐色を呈していた。D-5グリッドでは遺物は出土しなかった。

第5号溝跡 (第264図)

第5号溝跡はB-L-5・6グリッドに所在し、調査区を南北に縦走する。F-5グリッド周辺で僅かに蛇行するが、概ね直線的と言える。

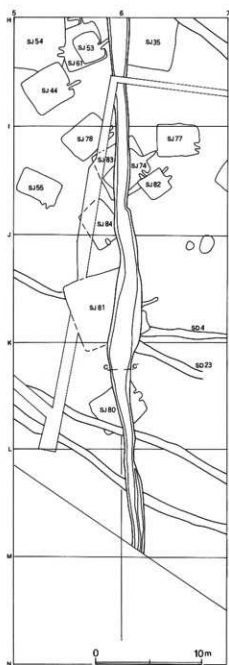
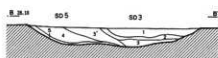
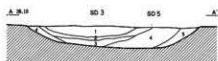
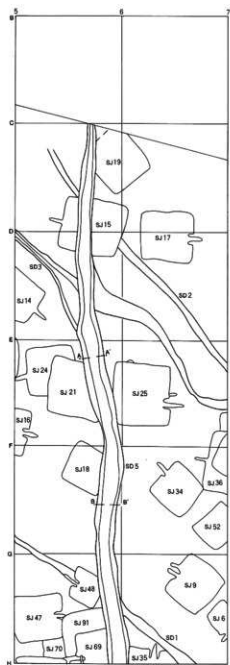
走行方向はおおよそN-5°-Wであった。上端幅0.82~1.90m、下端幅0.35m~0.67mであった。調査区南端のL-6グリッド周辺では2段の底面が検出されたが、3、5号溝のいずれかは不明であった。

最大深度は0.25mであった。断面皿状を呈する。底面レベルは北端のC-5グリッドで標高37.83m、屈曲するF-5グリッドで37.76m、南端のL-6グリッドで37.64mであり、北方向に向かって傾斜していた。本溝跡の底面直上からは酸化鉄粒子の沈殿層が検出された。また覆土中層には炭化物粒子の含有が認められた。本溝跡とほぼ平行し、近似した覆土を有していた第8号溝との間隔はおおよそ68~70mであった。

出土遺物 (第265図)

少量の遺物が覆土中より検出された。1~5、8は

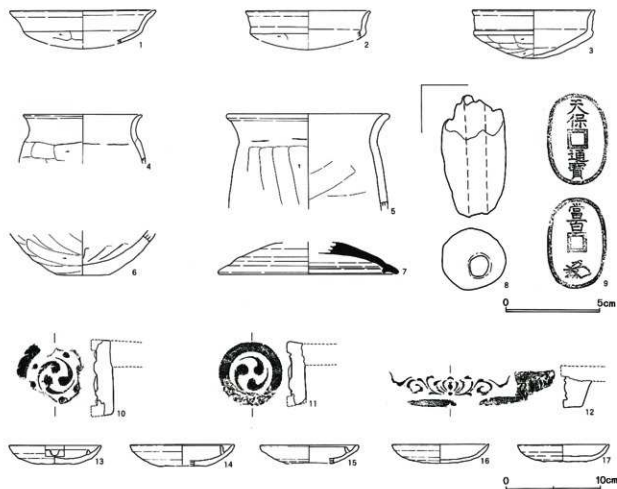
第264图 第3·5号溝跡



- 第3·5号溝 土層註
- | | |
|--------|------------------------|
| 1 灰褐色 | 酸化鉄粒子多量 炭化物粒子微量 |
| 2 灰色 | 酸化鉄粒子微量 粘土質 |
| 3 灰色 | 酸化鉄粒子多量 砂質 3' 灰色 2層土混入 |
| 4 暗灰褐色 | 酸化鉄粒子多量 炭化物粒子多量 |
| 5 灰褐色 | 酸化鉄粒子極多量 炭化物粒子少量 |



第265図 第3・5号溝跡出土遺物



3・5号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考								
1	环	(15.6)	(4.0)	5.8	BCEH	A	赤褐	10	白色重角礫多								
2	环	(13.4)	(4.1)		CGH	B	橙	15									
3	环	13.2	5.1		BCDGH	A	橙	75									
4	甕	(12.7)			BCEG	B	橙	20									
5	甕	17.4			BCGH	C	鈍黄橙	20									
6	甕				BCEH	C	鈍黄橙	60									
7	須恵器蓋	(19.4)			CH	C	黄灰	20									
8	土鍾	長(6.41)	径3.48		重68.72												
9	大保通寶																
番号	軒棧瓦	瓦当		文様 区径	内区径	周縁：面取			珠文		巴						
		径	厚さ			幅	高	内外	径	数		長	断				
10	軒丸部	—	2.5	6.0	4.4	1.2	0.7	—	0.9	8.0	3.2	台形					
11	軒丸部	6.8	2.0	4.8	—	1.2	0.5	—	—	—	2.7	下—上状					
12	軒平部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—					
13	灯明皿	(9.9)	2.0	4.2		A		40	土師質	受付き							
14	灯明皿					A			土師質	受付き							
15	灯明皿	(10.6)		(5.0)		A		15	土師質	受付き							
16	灯明皿	(10.4)	2.0			A		20	土師質	底部回転糸切り							
17	灯明皿	9.8	1.8	4.6		A		55	土師質	底部回転糸切り							

古墳時代後期に帰属すると思われるが、残存率は低く、周辺の該期住居跡からの混入の可能性が高い。

8は大形の土鎌である。近似した大きさのものは第79号住居跡から出土している。

また古代、近世の遺物が覆土中から少量出土した。

近世の遺物は主にJ-5・6グリッドから出土している。

7は須恵器蓋である。9は天保通宝である。10、11は軒椀瓦軒丸部、12は軒椀瓦軒平部である。13-17は土師質の灯明皿である。いずれも残存率は低い。

第8号溝跡（第266・268図）

第8号溝跡はD-M-11-13グリッドに所在する。本溝跡を北側から観ると、調査区際から方位およそN-50°-Wで22mほど走行し、E-12グリッドで大きく進路を替え、方位N-4°-Wではほぼ直線的に南下し、調査区外まで延びていた。I-7グリッド以南は土取りによる削平を受けていたが、完掘する事が出来た。

上端幅0.45-1.80m、下端幅0.23m-1.23mであった。屈曲するE-F-12グリッドでは底面は2段掘りとなっていた。覆土観察においても1-6層の堆積状況と7層が明瞭に異なっており、再掘削された可能性が高い。

最大深度は0.32mであった。断面形態は逆台形を呈する。底面レベルは北端のD-11グリッドで標高37.45m、屈曲するE-12グリッドで37.43m、南端のM-13グリッドで37.21mであり、極僅かであるが北方向に向かって傾斜していた。

本溝跡は第63、64号住居跡を壊していた。また第16号溝跡との新旧関係は判然としなかったが、覆土の様相から本遺構が新しいと考えられる。

本溝跡の底面直上からは酸化鉄粒子の沈殿層が検出された。また粗砂層も検出された。本溝跡とほぼ平行し、近似した覆土を有していた第3・5号溝との間隔はおよそ68-70mであった。遺物は出土しなかった。

第15号溝跡（第266図）

第15号溝跡はE-11・12グリッドから検出されたが、西側は緩やかに上昇し、底面の凹凸が僅かに残存して

いたのみであった。東側は第8号溝に切られていたが、底面レベルはほぼ同じ標高37.49mであった。また第7号溝を壊していた。

走行方位はおよそN-90°-Wであった。上端幅0.60-0.94m、下端幅0.40m-0.63mであった。最大深度は0.22mであった。遺物は出土しなかったが覆土は住居跡等と近似していた。なお本溝跡の延長上にはおよそ22mの距離を置いて第21号溝跡が所在する。走行方向はほぼ等しく、同一の遺構の可能性もあろう。

第7号溝跡（第266図）

第7号溝跡はD-E-9-12グリッドから検出された。北側は調査区外に延び、東側は第15号溝に切られる。調査区際では第19号溝跡と合流・分岐する。なおF-13グリッドに所在する第16号溝跡は、本遺構の延長にあり走行方位も同じである。連続して検出できなかったため遺構番号を変えたが、同一の遺構の可能性がある。また第8号溝跡とほぼ平行する。

走行方位はおよそN-60°-Wであった。上端幅0.45-0.65m、下端幅0.25m-0.38mであった。最大深度は0.18mであった。底面レベルは調査区際のD-10グリッドで標高37.59m、E-12グリッド周辺で37.56mであった。

出土遺物（第269図）

3個体の環が出土した。いずれも須恵器蓋模倣である。残存率はやや悪い。

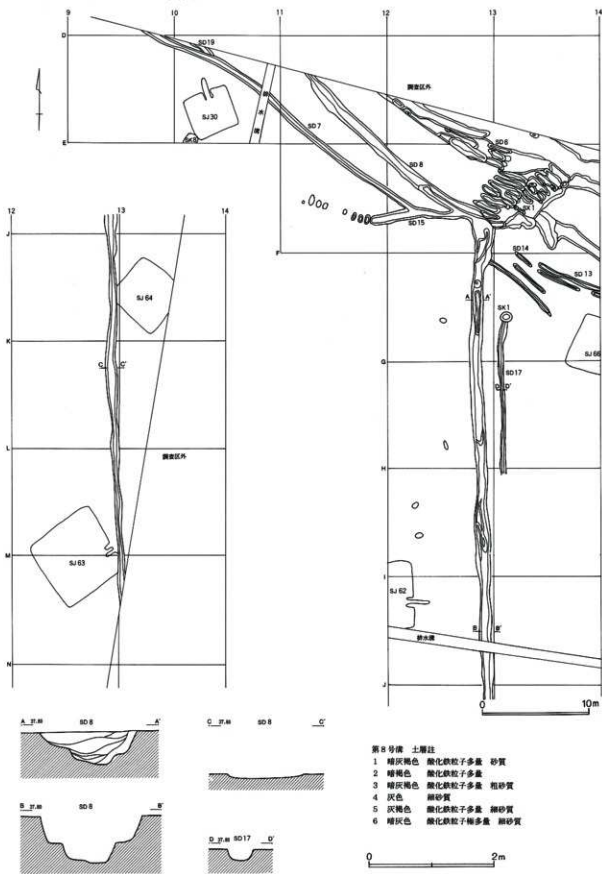
第19号溝跡（第266図）

第19号溝跡はD-10グリッドから検出された。第7号溝跡と合流していた。調査区際からの検出であり、確認できた長さは1.4mほどであったため走行方位は不明である。検出された箇所は北西方向に向かっていった。上端幅0.36m、下端幅0.25mであった。最大深度は0.09mであった。底面レベルは標高37.70mであった。土師器小片が出土したか否か判明し得なかった。

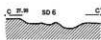
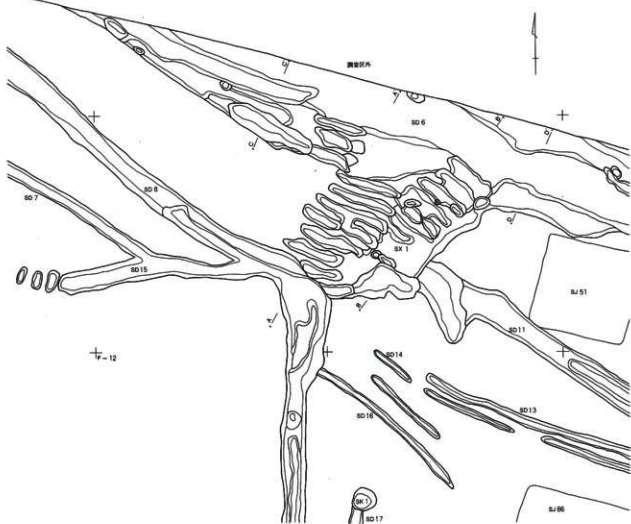
第16号溝跡（第259・267図）

第16号溝跡はF-13、G-H-14・15グリッドから検出された。途中途切れるものの走行方位が一致していたため同一の遺構名を付した。なお第7号溝跡とも

第266图 第7・8・15・17・19号溝跡

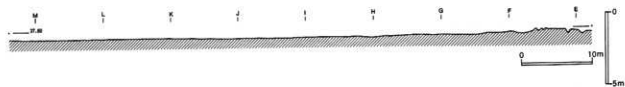


第267図 第1号性格不明遺溝

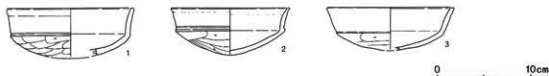


0 5m

第268図 第8号溝跡エレベーション



第269図 第7号溝跡出土遺物



第7号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.6)	(5.3)		CDEGH	B	橙	30	
2	坏	(12.8)	5.0		BCEGH	C	鈍橙	50	
3	坏	(13.6)	(4.6)		BCEGH	B	橙	15	

走行方向は一致するが、深度が明瞭に異なるため別遺構と判断した。

走行方位はおよそN-50°-Wであった。上端幅0.45~0.65m、下端幅0.25m~0.38mであった。最大深度は0.18mであった。底面レベルはF-13グリッドで標高37.66m、G-14グリッド周辺で37.48m、東端のH-15グリッドで37.40mであった。遺物は出土しなかった。

第17号溝跡（第266図）

第17号溝跡はF・G-13グリッドから検出された。南端の底面は緩やかに上昇しており、それ以南は削平された可能性がある。また北端は第1号土壌に壊されていた。

走行方位はおよそN-2°-Eであり隣接する第8号溝跡の走行方位とはほぼ同じであった。ただし北端が緩やかに東方向に曲がっていた。上端幅0.20~0.63m、下端幅0.15m~0.53mであった。最大深度は0.18mであった。底面レベルは北側のF-13グリッドで標高37.60m、南端のH-13グリッドで37.57mであった。遺物は出土しなかったが覆土は住居跡等と近似していた。

第1号性格不明遺構（第267図）

E-13グリッドから検出された。第6、8、12号溝と接するか、新旧関係は不明であった。同時期の所産の可能性も考えられる。

本遺構は2列の畝状の掘り込みにより構成され、全体として波板状を呈していた。それぞれの掘り込みは概ね独立していたが、部分的に連結していたものもあった。畝状の掘り込みの規模は、長さ3m、幅0.55m、

深さ0.18m前後であった。本遺構の全体の規模は南北7.2m、東西8.6mほどである。

それぞれの掘り込みの長軸方位は隣接する第6、8号溝とはほぼ一致し、北西方向を指す。

底面は堅緻であり、酸化鉄粒子の沈殿により黄褐色を呈していた。覆土下層からは粗砂層が検出されたことから水利に伴う施設の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

本遺構の性格は不詳であると言わざるを得ないが、複数の溝を連結するような位置と覆土の様相から、大規模な6号溝から他の小規模な溝に分流するための堰のような施設である可能性が指摘できる。遺物は出土しなかった。

第6号溝跡（第270・271図）

第6号溝跡はD-11~F-18グリッドに所在し、調査区北界を東西に横走する。F-5グリッド周辺で僅かに蛇行するが、概ね直線的と言える。

走行方位はおよそN-70°-Wであった。上端幅1.69~5.04m、下端幅0.75m~2.79mであった。

最大深度は0.67mであった。立ち上がりは緩やかであった。底面レベルは東端のF-17グリッドで標高37.16m、F-15グリッドで37.49m、西端のD-12グリッドで37.28mであり、明瞭な高低差はなかった。

本溝跡は大きく3回の掘削が行われたことが覆土から観察された。また底面は平坦ではなく複雑な様相を呈する。南側に向かって再掘削を行ったようである。覆土はシルト質土が主体を占め、鉄分の沈殿が顕著であった。また底面も酸化鉄の沈殿により黄褐色を呈していた。また覆土中層には炭化物粒子の含有が認めら

れた箇所もあった。

同一の溝跡の可能性のあるものか17号バイパス関連の調査区から検出されている。

出土遺物 (第272図)

少量の遺物が主に覆土中から出土したが、いずれも残存率が低く混入の可能性がある。

第11号溝跡 (第270・271図)

第11号溝跡はF-13-17グリッドから検出された。第12号溝跡と第14号土壌に壊されていた。また西端は第1号性格不明遺構と重複していたが新旧関係は不明であった。

走行方位はおおよそN-80°-Wであった。上端幅0.34-0.83m、下端幅0.21m-0.72mであった。最大深度は0.08mであった。底面レベルはF-14グリッドで標高37.70m、F-15グリッド周辺で37.65m、東端のF-17グリッドで37.63mであった。

覆土は灰色の粘質土で酸化鉄粒子の沈殿が顕著であった。遺物は出土しなかった。

第12号溝跡 (第270・271図)

第12号溝跡はF-13-17グリッドから検出された。第11号溝跡を切っていたが、11号溝同様、西端は第1号性格不明遺構と重複していたが新旧関係は不明であった。なお重複する部分の第1号性格不明遺構の平面形態は両者を連結する形態とも言える。

走行方位はおおよそN-80°-Wであった。上端幅0.50-0.92m、下端幅0.23-0.75mであった。最大深度は0.42mであった。底面レベルはF-14グリッドで標高37.28m、F-15グリッド周辺で37.41m、東端のF-17グリッドで37.67mであった。平行する同規模の4条の溝跡の中で最も深かった。

覆土は大きく3層からなるか灰色のシルト質主体で酸化鉄粒子の沈殿が顕著であった。

遺物は出土しなかった。

第13号溝跡 (第270・271図)

第13号溝跡はF-13-16グリッドから検出された。第12、14号溝跡と極めて近接するか重複はしていない。西端は途切れ途切れであったが、第11、12号溝

跡のように第1号性格不明遺構とは接していなかった。

走行方位はおおよそN-70°-Wであった。上端幅0.22-0.43m、下端幅0.15m-0.35mであった。最大深度は0.22mであった。底面レベルはF-13グリッドで標高37.53m、F-15グリッド周辺で37.50m、東端のF-17グリッドで37.64mであった。

覆土は粘質土主体で酸化鉄粒子の沈殿が顕著であった。なお本遺構の1、2層は第12号溝跡覆土の第2、3層に酷似していた。遺物は出土しなかった。

第14号溝跡 (第270・271図)

第14号溝跡はF-13-17グリッド周辺から検出された。他遺構との重複関係は第2号土壌に壊されていた。第13号溝跡とは近接して平行していたが重複はしていなかった。またG-16グリッド以来は検出されなかったが、削平されたと思われる。第12号溝跡東端で分流する溝が、走行方位から本遺構と同一の可能性もある。

走行方位はおおよそN-70°-Wであった。上端幅0.22-0.36m、下端幅0.15m-0.22mであった。最大深度は0.22mであった。底面レベルはF-13グリッドで標高37.56m、F-15グリッド周辺で37.59m、東端のG-16グリッドで37.53mであった。

覆土は灰色の粘質土で酸化鉄粒子の沈殿が顕著であった。遺物は出土しなかった。

第9号溝跡 (第273図)

第9号溝跡はN・O-11・12グリッドから検出された。調査区際からの検出であり、確認できた長さは1.4mほどであった。本遺構周辺は土取りによる削平を受けており遺存状況は悪かった。

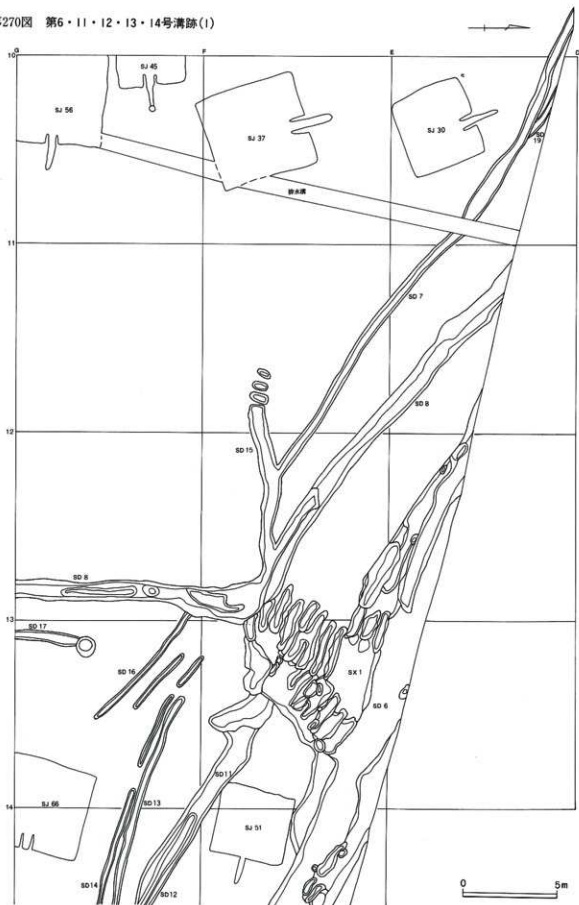
走行方位はN-60°-Wであった。上端幅0.80m、下端幅0.70mであった。最大深度は0.16mであった。底面レベルはN-11グリッドで標高37.30m、調査区際では37.26mでありほぼ水平であった。

本溝跡の西北西方向には第18、26号溝かおおよそ40mの距離をおいて所在する。走行方位はほぼ同じであるが、同一の遺構かは不明であった。

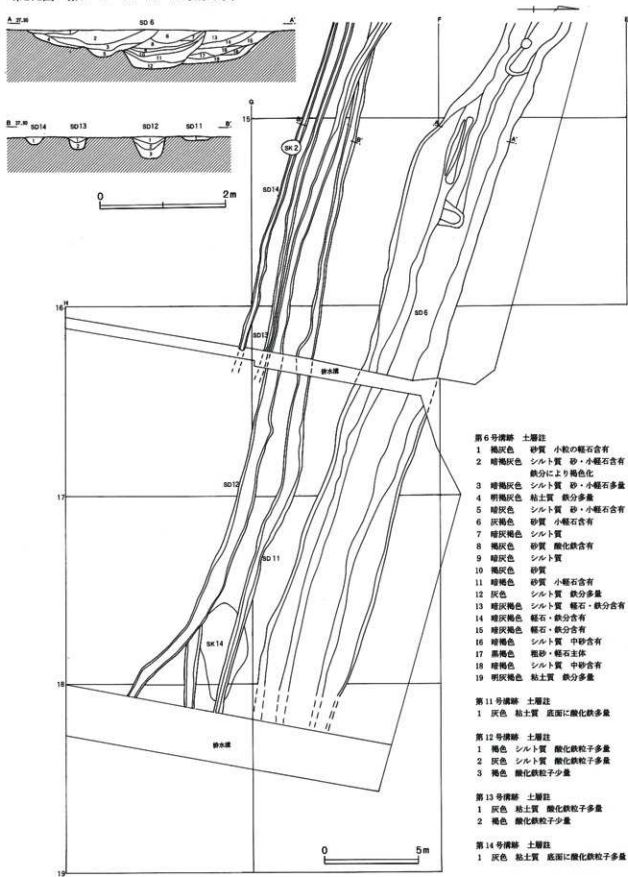
出土遺物 (第273図)

少量の遺物が底面直上~覆土にかけて出土した。1

第270图 第6・11・12・13・14号溝跡(1)



第271図 第6・11・12・13・14号溝跡(2)



- 第6号溝跡 土層註
- 1 褐色 砂質 小粒の軽石含有
 - 2 暗褐色 シルト質 砂・小軽石含有
 - 3 暗褐色 シルト質 砂・小軽石多量
 - 4 明褐色 粘土質 鉄分多量
 - 5 暗灰色 シルト質 砂・小軽石含有
 - 6 灰褐色 砂質 小軽石含有
 - 7 暗灰褐色 シルト質
 - 8 褐色 砂質 酸化鉄含有
 - 9 暗灰色 シルト質
 - 10 褐色 砂質
 - 11 暗褐色 砂質 小軽石含有
 - 12 灰色 シルト質 鉄分多量
 - 13 暗灰褐色 シルト質 軽石・鉄分含有
 - 14 暗褐色 軽石・鉄分含有
 - 15 暗灰褐色 軽石・鉄分含有
 - 16 暗褐色 シルト質 中砂含有
 - 17 黒褐色 粗砂・軽石主体
 - 18 暗褐色 シルト質 中砂含有
 - 19 明灰褐色 粘土質 鉄分多量

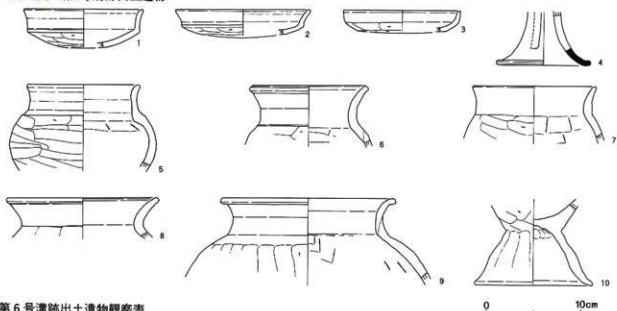
- 第11号溝跡 土層註
- 1 灰色 粘土質 底面に酸化鉄多量

- 第12号溝跡 土層註
- 1 褐色 シルト質 酸化鉄粒子多量
 - 2 灰色 シルト質 酸化鉄粒子多量
 - 3 褐色 酸化鉄粒子少量

- 第13号溝跡 土層註
- 1 灰色 粘土質 酸化鉄粒子多量
 - 2 褐色 酸化鉄粒子少量

- 第14号溝跡 土層註
- 1 灰色 粘土質 底面に酸化鉄粒子多量

第272図 第6号溝跡出土遺物



第6号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(12.8)	(4.1)	(10.2)	BCDGH	A	橙	20	透かし3単位 (2残存)
2	坏	(14.4)	(3.1)		BCEH	A	赤褐	15	
3	坏	(12.6)	(2.4)		BCDGH	B	橙	30	
4	須恵器高坏				CH	A	灰	30	
5	鉢	(12.2)			BCEH	A	橙	40	
6	壺	12.8			BCEGH	A	鈍赤褐	20	
7	甕	(13.2)			BCEGH	C	橙	20	
8	甕	(16.4)			BCEH	C	鈍黄橙	25	
9	甕	(18.8)			BCEGH	B	鈍褐	25	
10	台付甕				BCEGH	B	橙	80	

は覆土中から出土した須恵器甕である。2は底面直上から出土した土師器壺の胴部上半である。残存率は高かった。

第25号溝跡 (第273図)

第25号溝跡はO-10・11グリッドから検出された。本遺構周辺は削平を受けており検出できた長さは1mほどであった。走行方位はN-80°-Wであった。上端幅0.26m、下端幅0.18mであった。最大深度は0.1mであった。底面レベルは標高37.27mであった。

遺物は出土しなかった。

第10号溝跡 (第273図)

第10号溝跡は調査区南東端のQ-12グリッドから検出された。検出できた長さは東西に横走る5mほどであった。南肩部は調査区外まで延びており、走行方位、溝幅等の数値は不明である。

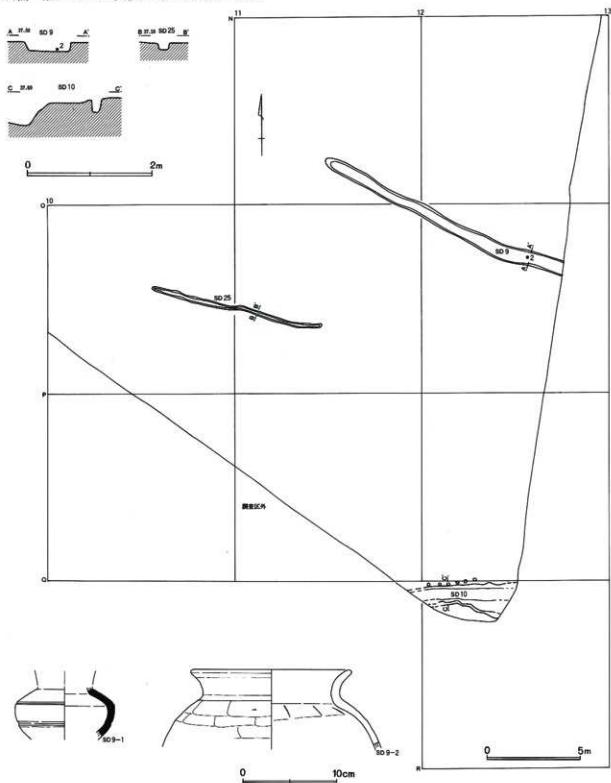
溝幅は下端が0.75m以上の規模の大きいものである。上面が削平されていたが、最大深度は0.45m、底面レベルは36.94mと深かった。

覆土下層に酸化鉄粒子の沈殿が観察され、水利に伴う大規模な溝跡の可能性が有る。なお調査区北端の第6号溝との距離は約120mである。

また北側肩部からピットが6基検出された。径0.15m、深さ0.20m程でおよそ0.5m毎に配置していた。

遺物は出土しなかった。

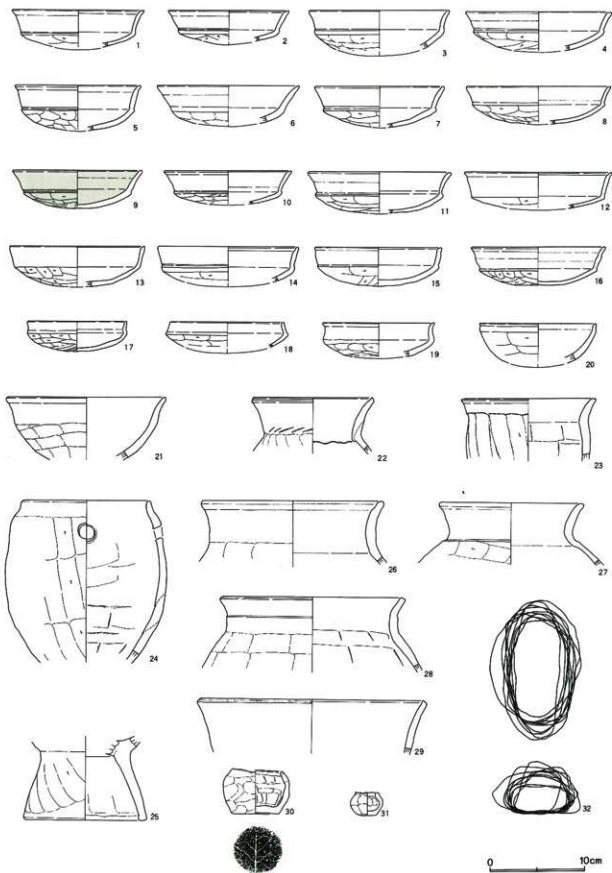
第273図 第9・10・25号溝跡・第9号溝跡出土遺物



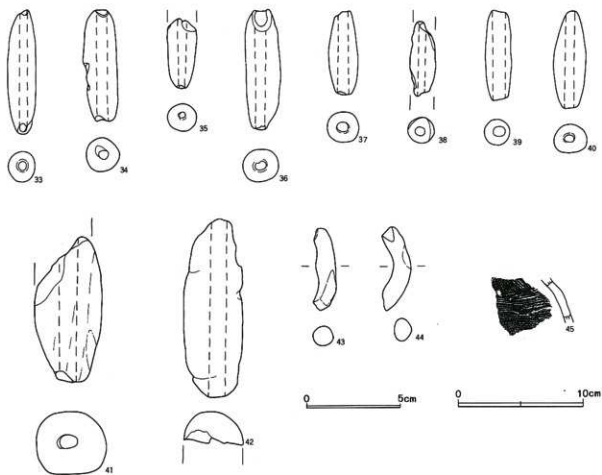
第9号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	施壺				C	A	灰	25	
2	壺	17.2			BCEGH	B	明赤褐	90	

第274図 グリッド出土遺物(1)



第275図 グリッド出土遺物(2)



(15)グリッド出土・表採遺物

(第274・275図)

本項では遺構に伴わず、主に確認面から出土した遺物について記載する。これらの遺物の多くは第4住居跡群等の遺構密集区において、帰属する遺構が判明しなかったものである。なおグリッド出土の縄文土器については、第1項に記載した。

環は計20個体出土した。1～16は須恵器蓋模倣の環である。9は内外面黒色処理される。17～20は形態と口径の小ささから本遺跡から検出された新相の住居跡と同時期のものと思われる。

25は台付甕の台部である。外面はヘラナデ調整される。器壁は厚い。帰属時期は不明である。

30、31はミニチュア土器である。30は平坦な底部と内彎する胴部からなる。外面は指頭ナデにより調整さ

れるが、内面は木口状工具により調整される。底部に木葉痕が残る。31は口径2.5cmと非常に小さい。内外面とも指頭により調整される。口縁部はやや肥厚しつつ外反する。編物石は10個体出土した。

土鍾は計10個体出土した。41、42は幅4cm程の大型品である。近似した大きさのものとしては第79号住一34が挙げられる。

43、44は不明土製品である。長さ4cm、幅1cm程で、指頭により成形される。断面形態は円形である。

45は壺形土器肩部と思われる。燃糸紋が施文される。焼成は良好で黒褐色を呈する。弥生時代後期に帰属すると考えられる。

グリッド出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(14.0)	(4.2)		BCEGH	C	鈍黄橙	15	G-8
2	坏	(13.0)	(3.7)		BCEGH	A	明赤褐	25	G-8・9
3	坏	(15.0)	(4.8)		BCEGH	B	橙	70	表採
4	坏	(15.6)	(4.3)		BCEGH	A	鈍赤褐	25	H-8
5	坏	(13.4)	(4.9)		BCEGH	A	橙	25	E-7
6	坏	(15.2)	(4.3)		BCEGH	C	鈍褐	25	F・G-9
7	坏	(13.8)	(4.4)		BCEGH	C	橙	30	H-8
8	坏	(15.4)	(4.1)		BCDEGH	A	橙	35	G-8
9	坏	(13.8)	(4.0)		BCEGH	C	鈍橙	25	H-8
10	坏	(13.6)	(3.6)		BCDEG	A	明赤褐	20	H-8
11	坏	(15.4)	(4.4)		BCEGH	A	明赤褐	20	H-8
12	坏	(15.8)	(4.0)		BCEGH	B	橙	25	G-8・9
13	坏	(14.4)	(4.3)		BCEGH	A	赤黒	30	G-8・9 黒色処理
14	坏	(15.0)	(4.2)		BCEGH	B	橙	20	G-8
15	坏	(13.6)	(4.1)		BCEGH	B	橙	15	E・J-16・17
16	坏	(14.4)	4.0		BCEGH	A	赤	25	H-8
17	坏	10.6	3.2		BCEH	A	橙	60	I-5
18	坏	(12.2)	(3.4)		BCGH	C	鈍黄橙	25	G-8
19	坏	(12.0)	(3.8)		CDEH	B	明赤褐	25	G-7 比企型 赤彩不明
20	埴	(12.4)	(4.6)		CDGH	A	橙	15	C-5
21	鉢	(17.0)			BCEGH	B	橙	25	E・J-16・17
22	壺	(13.2)			BCH	A	鈍赤褐	25	H-8 頸部折り込み明瞭
23	甕	14.4			CDEGH	B	鈍橙	25	G-5
24	甕	(13.8)			BCEGH	A	明赤褐	35	G-8・9 焼成前穿孔
25	台付甕			(13.2)	CGH	C	鈍黄橙	30	E-9 端部折り返し不整
26	甕	19.6			BCEGH	B	橙	30	G-17
27	壺	(15.4)			BCEGH	A	橙	25	
28	甕	(19.8)			BCEGH	B	橙	20	G-7
29	甕	(24.6)			BCEGH	A	明赤褐	50	K-7
30	ミニチュア	5.5	4.7	5.0	BCEGH	B	橙	100	I-4 木葉痕
31	ミニチュア	2.5	2.5	2.0	CGH	A	橙	100	K-9
32	編物石								10個体
33	土鍾	長6.68	径1.73	重18.40					E-8
34	土鍾	長5.98	径1.83	重18.15					E-9
35	土鍾	長(3.63)	径1.60	重(8.15)					F-8 欠損
36	土鍾	長6.35	径2.09	重25.12					F-9
37	土鍾	長4.46	径1.67	重10.42					F-9
38	土鍾	長(4.00)	径1.49	重(6.08)					G-9 欠損
39	土鍾	長4.98	径1.40	重8.86					I-5
40	土鍾	長5.18	径1.82	重12.73					J-6
41	土鍾	長(7.60)	径3.64	重84.95					J-7 欠損
42	土鍾	長9.55	径3.21	重53.61					J-7
43	不明土製品	長4.39	幅1.15	重6.94					F-10
44	不明土製品	長4.45	幅1.10	重7.00					F-10
45	弥生土器								

V 発掘調査の成果と課題

1. 古墳時代後期の土器編年

Ⅳ章までで述べてきたとおり、砂田前遺跡から古墳時代後期の大规模な集落跡が検出された。国道17号深谷バイパス関連、(以下バイパス調査区)岡部町教育委員会調査区を含めると竪穴住居跡計170軒を有する。なおバイパス調査区からは奈良、平安時代の住居跡も20軒あまり検出されたが、集落としては明らかに衰退傾向にある。この砂田前遺跡の衰退と相対する櫛挽台地上に占地する熊野遺跡や六反田遺跡等の盛行に表象される歴史的事象の解明は重要な命題の一つであることは多くの先学により指摘されてきた。しかし筆者の能力不足のため本稿では砂田前遺跡の出土遺物、遺構に限り検討を加えることとする。

本調査区から検出された住居跡の特徴の一つとしては遺存状況が良好であった点がまず指摘できる。また他の該期集落跡と同様に住居跡間の重複関係が顕著であった。ただし重複関係については、コーナー部のみ重複していたものや、床面の比高差が大きかったため、床面の壊されなかった例が大半を占める。したがって遺物の遺存率も概ね高かった。

本報告で設定した第4住居跡群においては、13軒の住居跡、1棟の掘立柱建物跡、1条の溝が重複していたが、それぞれの遺存状況は良好で、出土遺物の帰属する遺構が容易に判別できた。また本住居跡群の出土遺物は、ほぼ古相から新相まで継続していると判断した。したがって第4住居跡群出土土器を中心に本遺跡出土土器の段階設定を行いたい。なお欠落している段階、あるいは器種については、補完的に他住居跡群出土土器を援用する。

第276図は重複関係を基準として、住居跡一括遺物を単に配列したものである。覆土中一括出土のものはなるべく除外し、床面直上、カマド内出土、もしくは遺存率の高い土器を優先した。ただし覆土中出土の土器でも他遺構での共存関係の検討を経て掲載したものがあつたことを了承きたい。

第277図は住居跡出土遺物の中で最も多量に検出された須恵器環蓋模倣杯(以下蓋模倣杯)の変化傾向の抽出を目的とした模式図である。蓋模倣と認定したものである中で遺存率か50パーセントを超える個体(中宿5住を除く)のプロポーションを機械的に重ね合わせたものであり、段階設定の指標となる模倣杯の変化傾向、すなわち口径の拡大(外傾)化・扁平化を示した。

土器編年研究がより精緻化する現在、各器種、形態の系統毎による型式組列の検討、新出器種の出現する段階およびその背景等の検討、さらには該期の広域編年との整合性の追求が必須なのは自明なことであるが、本稿では基礎的作業の一端として集落内での土器の変化傾向を把握することを目的とした。

したがって本地域における土器編年を目途としたものではなく、「砂田前遺跡」の集落変遷の単なる指標を示したものに過ぎないことを予め断っておきたい。

I 期

I期に該当する住居跡は本調査区からは検出されていない。バイパス調査区の5号住(以下B5住と省略)を指標とする。

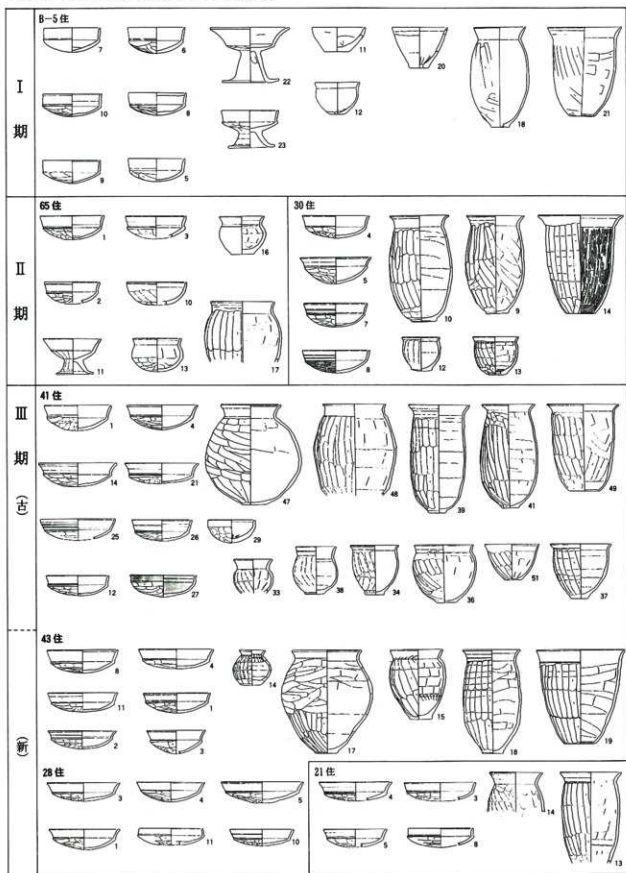
環はいずれも蓋模倣である。口径12cm、器高5cm前後で極めて近似した法量を示す。

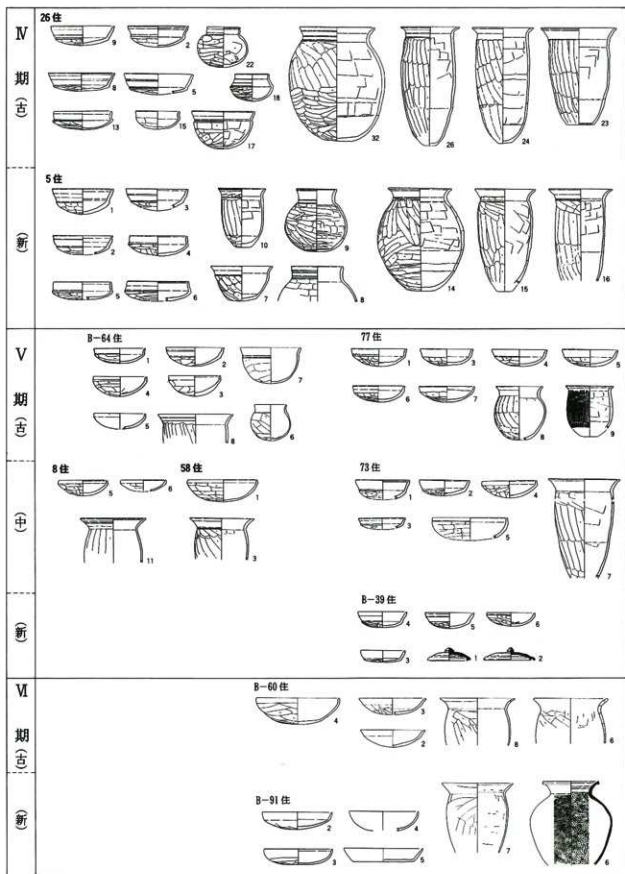
22は和泉式系講の高環と考える。明瞭な稜を有し大きく外反する坏部を有する。脚裾部は強く外傾する。脚は23と比較する限り長いと言えるが、和泉期のものとは大きな隔絶がある。なおⅡ期B50住からも同系統の高環が出土している。23のいわゆる須恵器模倣高環はⅡ期52住、72住から出土しているが本例よりも口縁部外反が顕著で新相を示す。

18の甕は最大径を胴部中に有し、口縁部はくの字に外傾する。前代に盛行する球形胴指向の甕形土器は出土していない。20は鉢型の小形甕、21は大形の甕である。大形の甕、甕の頸部は明瞭な稜を有し、直線的に外傾する。

なお隣接遺跡でI期に比定される遺構としては、中

第276図 第4住居跡群を中心とした土器編年表





宿遺跡5、6住が挙げられる。環はB5住同様に近似した器形を示しており、夔等もほぼ同様な形態を示す。しかしI期以前の模倣環のいわゆる初源段階の遺構は近隣からも未検出の状況である。

II期

第4住居跡群中の65住、および16住、29住、30住を指標とする。本調査区からは17軒、バイパス調査区からは10軒が検出されている。

環はI期同様に蓋模倣環が主体を占めるが、口径13cm前後のものが主体を占める。口縁部の外傾化は認められるが扁平化はそれほど認められない。また口径17cm前後のものが29住、62住、B-23住から検出されている。いずれも口縁部は外傾するがIII期以降の大形環のような口縁部外反、扁平化は認められない。30住5のような口径約15cmで口縁部が短く外傾する環は本期から出現し、以後III期新段階まで系譜が続くと考える。30住8の有段口縁環は口径14.5cmで主体となる蓋模倣環よりやや口径が大きい。また成形段階の粘土圧着に起因すると思われるが、僅かに口縁部は内傾する。体部の最終調整はヘラミガキである。

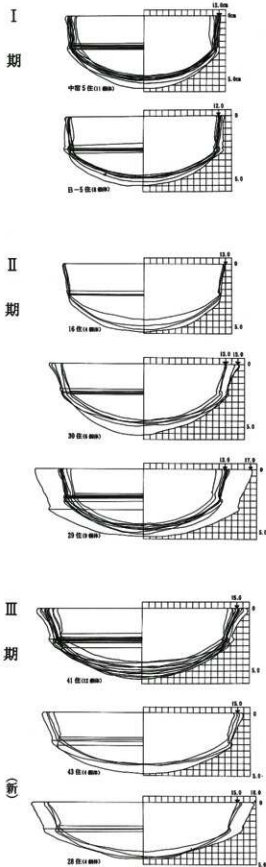
65住11は大きく外傾する環部と裾が強く屈曲する脚部からなる高環である。類別は本遺跡から多数出土しているが、II～III期古段階に集中する。共存する環と比較すると環部高は高く、大きく外傾している。短脚であるものの和泉式系譜の環部とも言えよう。

夔はI期から大きな変化は認められないが、30住-10のように最大径を胴部中位やや下半に有し、突出した底部は7～8cm前後と大きく、底部から胴部下半にかけて湾曲しながら立ち上がるものが主体を占める。また底部に木葉痕が残る個体は本期か主体でありIII期以降ほとんど認められない。

甌は大形甌とともに、30住13の小形の夔形を呈するものが認められる。52住からは多孔式の底部破片が出土しているが主体は単孔である。

甕、甌の口縁部形態は外反化の認められる個体が出現するが、本期においてはI期同様の外傾するものと、30住10のように上位で小さく屈曲する2者が主体を占

第277図 模倣環の変化傾向



める。

また52住34は膨らみのない直線的な胴部から強く内傾し底部に至る。口縁部と胴部最大径がほぼ等しい。口縁部のシャープな外傾はII期特有のものであるがIV期以降の変形態に近似するとも言えよう。

III期

本遺跡の住居跡数が急激に増加する段階である。本調査区から35軒、バイパス調査区から26軒検出されている。第4住居跡群の41、43、28住を指標とする。なお41住は環、長胴甕、大形瓿等が床面全域から多量に出土し人為的な廃棄の様相を呈すが、出土位置は床直一覆土下層にはほぼ限定することから一括出土と認定した。

本期は蓋模倣環の扁平化が最も進行する段階であり、それらを基準に2段階に分割した。すなわち口径15cmで体部高が5cm前後を古段階、口径が同じく15cmで体部高が4.0～4.5cm前後を新段階とした。

有段口縁環は古段階では13住、49住、83住、B4住、B10住、B25住、B28住等から検出されており確実に器種組成の一端を担うと思われる。41住25、26のように大形、小形の2形態が認められる。大形の有段口縁環は口径15～16cm、器高4cm前後で外傾もしくは緩やかに内彎するものが主体を占める。段部の作出はシャープである。古段階から新段階にかけてやや口径が縮小する傾向にある。IV期以降には本例は認められない。体部調整は83住21がヘラミガキだが、主体はヘラケズリである。黒色を呈する個体が多い。小形の有段口縁環は口径13cm、器高4.5cm程度で、IV期以降、主体を占める形態となるが、本期のものは体部高が高く、段部の作出がシャープである。なお49住からは蓋、身模倣、有段口縁環が完形で出土しておりIII期古段階の良好な一括資料である。比企型環は本調査区17、22、41住、バイパス調査区17住から計4個体出土しているが、本調査区例はいずれも本期に属する。

甕はII期と比較すると口縁部外反がやや強くなる。最大径は胴部中位でもやや上方に位置する個体が認められるがII期との明瞭な画期は認められない。ただし13住13のように口縁部が短く強く外反し、最大径とな

る個体も認められる。III～IV期の過渡期の資料に位置付けられる。類似する甕としては中宿遺跡11住が挙げられる。III期的様相の甕とIV期の様相の甕が共存している。環は口径14cmの蓋模倣と有段口縁環が主体であり、蓋模倣の小型化も認められる。共存する身模倣環は稜部が明瞭に突出する。

IV期

第4住居跡群の26、5住を指標とする。本調査区からは11軒、バイパス調査区からは21軒検出されている。本段階から有段口縁環の出土量が急激に増加する。

本期は有段口縁環の盛行期に位置付けられるが口径の大小および体部の形態を基準に2段階に分割した。

前段階まで主体となっていた蓋模倣環の組成比率は減少し客体的存在となる。15住1のように口径14cm前後のものが多くIII期新段階から縮小傾向を見せる。さらにIV期新段階のものは有段口縁環の変化傾向と同様に口径が縮小し、体部底面がフラットになるものが出現するなど、形態が多様になる。さらには26住2のようにやや張り出す体部から小さく直立した後に緩やかに内彎して立ち上がる（黒色処理・ヘラミガキは施されない）。この口縁部形態とIII期の外反する口縁部を有する蓋模倣環との間には型式組列の上で大きな断絶があると考える。つまり本期の蓋模倣は有段口縁環の口縁部成形の影響を受けたものが出現する。

またIII期段階まで客体的な出土量であった身模倣環の組成比率が高くなる傾向が伺える。しかし26住13、5住4～6のように突出部は丸みを帯び、口縁部の内傾は弱い。分量および口縁部の傾斜角度等において、須恵器の変化傾向とほぼ一致していたIII期段階までのものとは同系列には扱えない。

甕形態もIII期と大きな断絶が認められる。すなわち胴部最大径を口縁部に有する砲弾形を呈し、器壁の厚い口縁部は強く屈曲する。頸部内面の稜線が不明瞭となる。底径も3.5～5cmと極端に縮小する。IV期新段階には口縁部屈曲がやや弱くなる。胴部上位に斜位ヘラケズリ調整が施される個体が出現するが、後続する甕の出土例が乏しく技法的に定着するか不明である。

V期

いわゆる内屈口縁環の出現前後を示す段階から本期としたが、遺物の出土量が僅少で良好な一括資料は提示できない。また本期に帰属する住居跡出土の環の形態、法量は多岐にわたり、それが時期差を示すものか共時的な法量分化に起因するかは本遺跡出土例のみでは判断に苦しむ。したがって他地域、他遺跡の編年案を参考に便宜的に古・中・新段階を設定した。

蓋模倣環、有段口縁環は前段階と比較すると明瞭に法量の縮小傾向を示す。稜部、段部の作出もナデあるいは体部ヘラケズリのみにより表現される個体が多い。

古段階としたB64住からは上記3形態の環が出土している。口径は2の有段口縁環が12.4cm、それ以外は10.8~11.5cmである。3、4は丸底指向の底部と小さく直立する口縁部からなる。

77住の環は口径12cm、器高3.6cm前後とはば法量は等しい。いずれも蓋模倣の承譜と考えられる。他遺構からは近似した法量のものも検出されていない。B64住に先行する可能性もあるが、他器種で比較検討できないため同時期と仮定しておきたい。他に古段階に相当するものとして3住、B37住が挙げられる。

中段階とした第4住居跡群の2、58住は内屈口縁環から73住併行と想定した。いずれも口縁部の屈曲は明瞭で体部ヘラケズリは口縁直下まで行われる。73住1は口縁内面に沈線を有する。口径11.6cmである。古段階から縮小傾向にある。他に中段階に相当するものとして39、74、75、44住、B77住等が挙げられ、V段階中でも最も軒数が多し。

新段階のB39住からは3形態の環が出土しているが口径の縮小傾向が顕著で4、5の有段口縁環が10.5cm、3か9.6cmとIV期以降の食器器種小形化のピークとなる。89住も新段階に相当する。

器形の全容が明らかになった環は出土していないが、IV期段階と比較すると口縁部屈曲が弱くなり端部が平坦を指向するため凹状となる。胴部最大径は上位に位置する。胴部上位に斜位ヘラケズリを施す個体が目立つ。

本期においては蓋模倣・有段口縁環の口径はほぼ1cm刻みの縮小傾向を見せる。これが確実に時間差を示すのかは本遺跡のみでは追証できない。中段階から環類の法量分化が顕在化すると思われるが、後続する良好な一括資料がなく不詳と言わざるを得ない。

VI期

本調査区からは検出されていない。奈良時代に帰属すると思われるが、後続する土器群として掲載した。他地域の編年と照らし合わせるとV期新段階からI段階欠落している可能性もある。

V、VI期は熊野遺跡、中宿遺跡の形成、盛行する時期に該当すると思われる。特に熊野遺跡からは相当数の住居跡、掘立柱建物跡が検出されている。これらの分析の結果を待って、本遺跡のV~VI期の間に断絶があるのか、あるいは数軒単位で継続しているのかを再検討したい。

まとめ

本遺跡の特徴としては、まず模倣環の初原段階(砂田前I期以前)が欠落している点が挙げられる。さらにはI期の遺構もII期以降に認められる住居跡軒数の爆発的な増加を踏まえると僅少と言わざるを得ない。

砂田前I期はおよそ500m南の台地上に立地する白山4号墳と併行すると思われる。したがって本集落跡はFA降下に前後する時期(坂本1996)から出現し、急速に発展したと考えられる。

この時期別の集落消長については全果的に分析した田中氏の論考(田中1992)に詳しいが、本集落の盛行するIII期(田中編年IV期)に集落のピークを迎える遺跡は東北部を概観しても極めて少ない。これを該期集落間における距離的な「ネットワーク」に帰結させるべき考古学的事象かは遺跡・遺物の分布論を踏まえて追証し続ける必要がある。

まったく触れられなかったが、近接する熊野、中宿、岡部糸里遺跡との時間的な関係についての検討も必要である。なぜならば本地域は古墳時代後期以降の通時的分析が可能で、数少ない地域と言えるからである。

2. 縄物石

砂田前遺跡からは通称「縄物石」、「こも石」、「八人坊主」等と称される自然礫が多数検出された。敲打痕等は確認されなかったが、大半が住居跡床直～覆土下層から出土しており、明らかに人為的な遺物である。

本調査区からは計338個体が出土しており、27住など土器の出土は少量であったにもかかわらず30個体出土している。また12個体出土した住居跡が6軒と多く、一つの単位となる可能性がある。ここでは主に12個体以上出土した11軒の住居跡を中心に概観したい。なお時期別出土量としてはⅢ期新～Ⅳ期新段階において特に多く、26軒中から計155個体出土している。

出土状況は大きく3タイプに分かれる。一箇所に集中するもの(20、1、85、5住等)、壁面に隣接してやや集中するもの(21、27、32住等)、床面全域に散在するもの(26、79、62、28住等)である。集中、やや集中するものはいずれもカマドから離れた壁際、コーナー部である。12個体以下でも集中して出土した住居跡はほぼ同様な傾向にある。なお33住においてはカマド対面の壁際ピット中から5個体出土している。焼失住居跡においては79住からは散逸して12個体、43住からは9個体出土した。

第278図上は縄物石の重量分布を示すヒストグラムである。遺跡出土の338個体と12個体以上出土した住居跡11軒の重量分布を図示した。両者はほぼ同様な正規分布を示し、300～800グラムがピークとなる。このピーク内においては住居毎のさらなる指向性は現れていないと思われる。

下図は縄物石338個体の長さ×幅の分布図である。長さ12～17cm、幅4～7cm内に集中傾向が認められる。ただしⅣ章で掲載した縄物石の重ね図の通り、形態的に酷似した一括出土が多い。実験したわけではないので薦等を編むための2個体の重量偏差の許容範囲は不明であるが、選択の基準としては一定の重量であることもさることながら形態を最重視したと考えるのが妥当と考える。

個体毎の計測値については章末に掲載した。

第278図 縄物石の重量と大きさ

